Studio ***46
水晶兎

目次

水晶兎 1
開幕 3
序 12
破 22
急 37
終幕 47

水晶兎

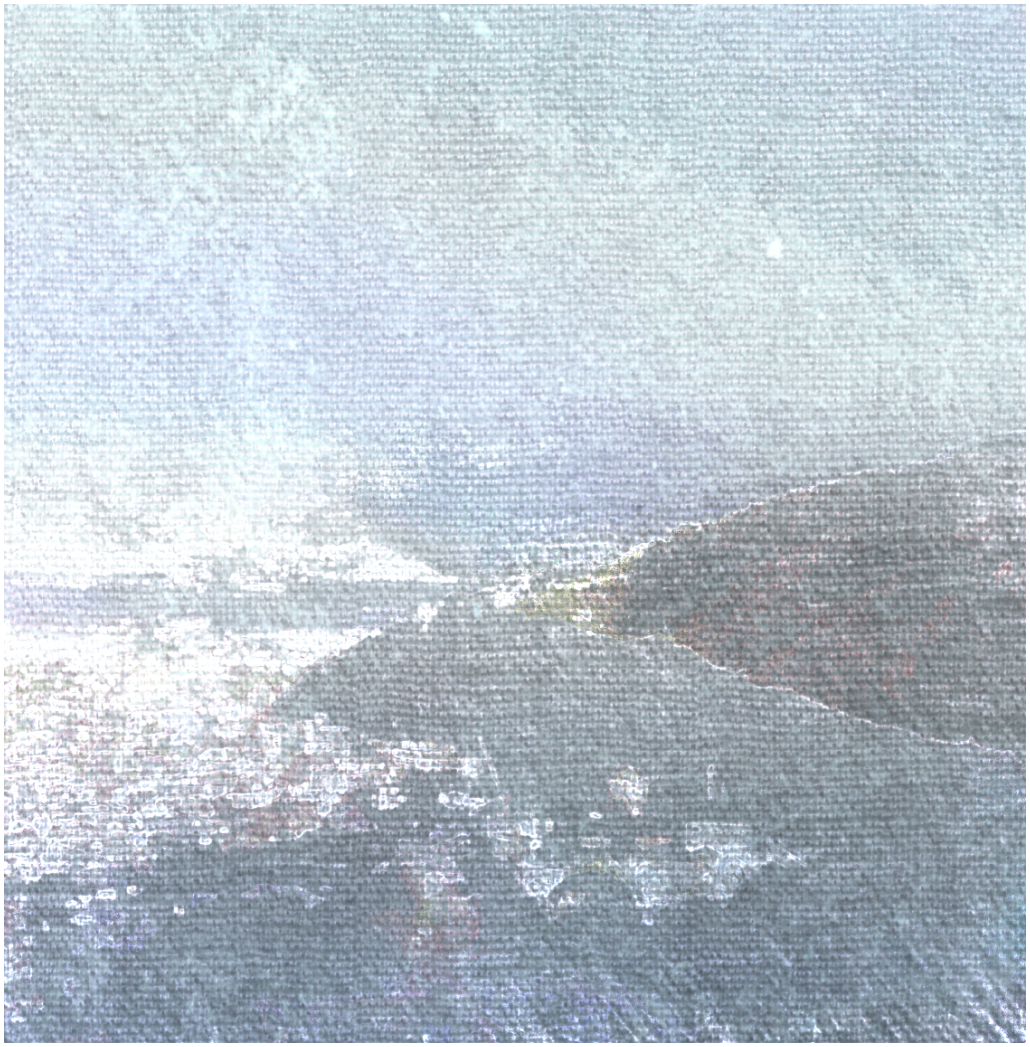
　死んだものは蘇らない。どんな不思議の世界であっても、それは原則そのはずだった。
　我執の尽きない魂を持ち、器があれば目覚める魔物は、正確には死んではいない。死とは意識の連続の断絶であり、記憶が閉じる事態をさす。どんな状態でも何かで己を保つのが「魔」で、命の「意味」を保つことで不滅となる「神」とは、自我の在り方が違う。
　「神」は器によって己の力、「意味」の出し方を変えるが、「魔」は器を変えてでも己を保つ。「神」は器の本来の主を取り込むが、「魔」は器に仮に潜む執念に過ぎない。

　それなら彼の、古い鼓動は何だと言えるのだろう。生まれた時から大人のように完成された「力」を持ち、扱い切れずに何度も暴走させた経緯は「魔」の如き。しかし「力」は彼そのもので、仮に潜む魔ではない「神」の在り方。
　あまりに危険な子供だったので、彼は隠れ潜む化け物の集落から離して育てられた。やがて両親は外来の強敵に遭い、増援も間に合わずに殺されてしまった。
「俺が生まれなければ、里はいつまでも一つだったのかもな」
「んなこと言うなや。二軍の奴らは、あれはあれで本望なんやろ」
　自身の気の「力」で構成する獣を、霊体で従えるのが彼らの種族だ。その霊獣族の長の息子である悪友は、いつしか分断した里で、彼の側についていた。少数派で強い彼らと、一般の化け物の間には深い溝ができていた。
　その後に霊獣という種族の大半は、西の大陸の覇者である四天王の傘下に入った。今では人間に偉そうな顔をしているとのことで、長である悪友の父は同族達を見捨てられずに同道し、息子には望む通りの自由を与えた。

　悪友は、今もいつ暴走するかわからない彼と、北の海の岸壁近くに細々住んでいる。そこにある山小屋は四つで、両端に彼と悪友、そして間の二つには彼らのように、はぐれ者の少年と少女を匿っていた。
「ま、おれらはせいぜい、うちの本来の役目をこなそーや。ここからアカン海獣が上陸せんよう、代々霊獣はずっと戦ってきたんやからな」
　北の海は、酷く寒冷であるためなのか、巨大化した魔物が多い。彼の両親もそれで殺され、彼は十二の歳から一人暮らしだ。

「……そうだな。俺もじきに、父さんと母さんの横に並びそうだし」

　彼を包むその現実に、暗いこと言うなや、と顔をしかめる悪友の前で。彼は今日も、泣き出しそうな灰色の空を見上げた。
　何かが足りない。そんな思いが何故か昔から、胸の奥底をよぎりながら。



開幕

　倒しても倒しても、魔物である海の獣は、新たに適合する体を見つけるとまたいつか襲ってくる。今日の敵は岸壁を上がれない大きさだったので、砂浜に降りて一人で片付けた直後のことだった。
「……何だ、あいつ？」
　少し離れた波打ち際に、兎くらいの何かがあった。彼の赤味がかかった灰色の眼には、悲しげな玄(くろ)い大気が周囲に見える。眼と同じ灰色の短い髪で、一部だけ黒い房のある前髪をかきあげ、彼は何かの方へと遠目をこらした。
「気を失ってるのか。あのままじゃ、潮が満ちたら溺れてしまう」
　どうやら危ないものには視えなかったので、彼は無防備な枯草色の上下のまま近付く。海の魔物の襲来警鐘で起こされたので、動きやすい黒衣に着替える暇がなかったのだ。

　そうして、渦巻く悲しげな大気の下に、尖った長耳の小動物が倒れていた。薄い青の珍しい毛色で、空色兎？　　と思ったのだが、抱き上げると小さな額に、普通の兎にはない菱形の紅(あか)い水晶が張りついていた。
「何だこれ……召喚獣の絵本でみた、カーバンクルみたいだな」
　揺すっても水晶兎は起きず、生きているのかすらも怪しい。仕方ないので、山小屋の一つに住ませている、回復魔法が使える少年の下へ彼は向かった。

　彼の無味乾燥な狭い山小屋は、海に一番近い場所に構えている。そこから少し森に入った所に、三つの山小屋が色とりどりに、奥に向かって建てられている。手前の屋根を青く塗る家で、蒼い目と紫苑色の髪をもつ十三歳の少年が眠たそうに彼を迎えた。
「何、これ。精霊でもないし魔物でもない。妖(あやかし)って言うには兎そのものだし、力の気配も全然しないし」
「精霊じゃないのか？　　自然の力が周りに渦巻いてるんだが」
　彼に視えている水晶兎の悲しげな気色は、少年にはわからないものだ。彼には生まれつき、「力」が視える特殊な眼がある。大体色で分けられて視える個々の「力」は、青や紫などの寒色が自然、赤や黄などの暖色が聖者、翠や紅系は妖や魔物に多い。
「兄ちゃんの眼でそう視えるなら、そうなんだろうけど。自然でも精霊の系じゃないよ、こいつ」

少年は精霊と契りを交わす霊力主体の化け物の出で、神泉に宿る精霊の力を借りた補助魔法と、一族に伝わる特殊な法具作りを得意としていた。それでいえば生粋の自然の一派である少年は、水晶兎を抱えたまま隣の山小屋に向かった。
「桃花（とうか）にきこう。レイアスの兄ちゃんでわからないものは、大体あいつの方が知ってること多いだろ」

壁の木の色が薄い真ん中の小屋には、妖精の森から逃げて来た十四歳の少女がいた。気配は紛れもなく「力」なき人間なのに、化け物には滅多にない特殊感覚を持つ少女だ。
ちょうど朝ご飯を作っていたという桃花が、誰も行くと言っていないのに、三人分の準備をし終えたところだった。
「おはよう。何となく、来ると思ってた」
人間らしい、無機質な黒髪と黒い目。隣の少年ラストが渡した紅いリボンでいつも小さく髪を括る。そのリボンは手作りの法具で、魔除け兼物入れの機能があり、重い物も運べるので非力な桃花は重宝している。
まだ誰も朝食前で、そうしたことに目敏い桃花の小屋に、ありがたく水晶兎つきで上がらせてもらった。

屋根が緑の蔦で覆われる最奥の小屋の、悪友はわけあって遠出している。三人でラスト製の食卓につくと、焼き立てのパンを囲みながら、テーブルに置いた意識の無い水晶兎に、桃花が無愛想で幼げな顔をしかめた。
「……そっか。もう、来ちゃったんだ」
「？」
「こいつのこと、知ってるのか？　桃花」
さくさくのパンを食べるのに忙しいラストを置いて、桃花は温かい紅茶を静かに口に含む。十四歳と若いわりには、いつも冷静なのが桃花だ。
「このこ、多分、私の追手。……でも、レイアスのそばにいないと、このままじゃ死んじゃうと思う」
「――は？　何で、俺の？」
妖精の森で、躾に厳しい里親の下を抜け出した、と桃花は初対面で語った。この大人しい少女に、躾？　と悪友とラストと一緒に首を傾げ、しばらく匿ってやることにした。それからそろそろ、二年がたちつつあるのが今だ。
理由はわからないが、何となく自分の周辺、目の前のもののことがまばらにわかる感覚を持つ桃花は、無表情のまま首を傾げて言った。
「……多分、このこ……レイアスの赤い獣と相性がいい」
それは彼にとって、暴走した時に入れ替わって勝手に暴れ回る、困りもののもう一つの彼だ。最近では滅多に変化することはないが、それでも彼が手綱を失った時には、いつ周りを傷付けてもおかしくない「力」。
「ご飯はいらない。お水だけ、起きた時には飲めるようにしておいてあげて」

結局、彼が引き取ることがあっさり決定になってしまった。見つけたのも彼なので仕方ないのだろうが、桃花はこういう時には頑固で、言い出したことを譲らない部分がある。
ラストなどそれで、桃花とは度々口喧嘩をしている。どちらも自分のいた場所から逃げて、ここまで来た者同士なのに。

自分の山小屋に帰ると、桃花が飼っていた山鳥の鳥籠を、彼は水晶兎のために綺麗に洗った。兎サイズの小動物には小さいだろうが、他の獣に襲われ難いようにするためだ。
「これで軒先に吊るしとけ、って……桃花の発想は、相変わらず謎だな」
桃花にもらった、小さな柔らかいクッションをひいた。人間である桃花は、こういう小物をよく自力で作っている。彼らの服は山の麓、人間の町で買った物がほとんどで、人間は量産品作りが得意、というのが彼のイメージだ。
「まあ確かに、この方がこのまま、持ち運びもできる。……タツクが帰ったら、いよいよ決行かもしれないしな」
悪友は今、外の世界に、あることを調べに長く旅立っていた。ラストがここまで逃げて来た三年前に、ちょうど彼らの里も分断されたばかりで、寄せ集まったはぐれ者にはそれぞれの願いがあった。

鳥籠に入れ、窓のふちに置いた水晶兎は、目を覚ますことが全くなかった。身動きもしないので、本当に生きているのか、と彼は眉をひそめる。
ただ、人形とは違う柔らかさと、微かな温かさだけがある。額の紅い水晶を中心に、普通の動物とは違う悲しげな大気に包まれている。
「……まあ、どうせずっと、一人だったし」
もしも水晶兎が起きたら、鳴き声をきいて名前を考えてやろう。そう思いながら、その日は今朝に倒した魔物の皮と肉を干す作業で終わった。
悪友と彼は、「力」がヒト並み外れて大きいために、身を隠すように生き続けてきた。未来に何の展望もなく、せめてなりゆきで匿ったラストや桃花は、幸せになれるように手伝ってやりたいくらいだ。

ラストが作ってくれた共同水あみ機に、井戸の水を沢山足した。本日の生活はこれで終了。体はほとんど成長し切ったので、食事も一日一食で充分な彼は、海の監視以外にすることが少ない。
ラストは全員の役に立つ法具を暇があれば作り、真っ先に桃花に見せにいっては、妖精の森にもそれくらいあった、などとあしらわれている。そう言うわりには桃花は、ラスト製の生活備品を一番使っている。
「そもそも、桃花のために作ってるんだろ、ラストも……」
寝床に入り、夢現につい呟いていた。弱い人間である桃花が、この最果てで不自由少なく暮らせているのは、間違いなくラストの功績なのだ。

そして彼が、孤高な眠りに落ちてすぐに。
その運命が小さな扉を開けたことを、今はまだ気付けるはずもなく。

自身の内で暴れる「力」を、常に抑える彼の眠りは浅い。なので大体睡眠が足りず、日がなぼーっと過ごしていると、日々はまるで夢の中でもあった。
望みなんて、何も持てない。気を抜けば今にも、赤い獣が暴れ出してしまう。幼い頃はそれで常に剣呑だった彼が、穏やかに人と話せるようになっただけでも、少しは歳をくった甲斐があった。
彼が暴走する時に変わる赤い獣は、最早ほとんど、世界の何処でも見られなくなった「飛竜」の姿をしている。一触即発の危険な古い獣が、そうして今も存在していることが知られてしまえば、彼は東西南北の四天王の的になるだろう。四天王とはこの世界で、「力」ある化け物の素行を取り締まる建前の悪魔なのだ。

だから、西の四天王の配下となった元仲間達が、彼の存在を四天王一派に教えていないこと。それだけが彼の平穏を維持している。元仲間達はおそらく、自分達を取り立ててほしいので、仲間達より強大な暴れものだった彼のことを四天王に明かしていない。
そんな綱渡りの生活が、いつまで続くだろうか。浅い眠りの中で何度も彼は、今の生活が悪魔に壊される悪夢を見て来た。ラストも桃花も巻き込まれて、悪友も彼のために捕われてしまう。
そうした未来が、もしも本当に有り得た時は、彼一人で暴走して、どこぞで野垂れ死にすればいい。だから今回、水晶兎の世話を引き受けてしまったのは、彼には多少の誤算でもある。

ふっと。彼は、紅い水晶を額につける兎が、目を覚ました夢を見ていた。
――.....いいの。どうか、無理をしないで.....ルイ。
誰かが悲しげに、水晶兎に語りかけていた。そして鳥籠の扉を開けて、兎はそこから、外に出ていってしまい.....。

はっと、慌てて起きた彼の枕元で。開けていた窓に置いた鳥籠が、夢の通りに扉が開き、もぬけの空になっていることにすぐに気付いた。
「誰だ.....？」
小さな閂(かんぬき)で閉じられた扉は、兎の手では中から開けられないはず。誰かが鳥籠から水晶兎を持っていった、と寝ぼけて思った。
「どこだ.....」

おぼろげながら、取り返さなきゃ、と彼は、戦闘用の黒衣にまで着替えていた。背中に剣を担げるベルトを体幹にかけて、まだ頭は半分眠ったまま外に出ていた。
満月の白い灯りが彼を照らす。そのまま潮の匂いに誘われるように、日中に水晶兎と出会った砂浜を、無意識に目指していった。

彼は普通の化け物（千族）——ヒト型の千種の種族とは違い、気配を探知する感覚が鈍い。代わりに「力」が視えるのだろうが、海の監視にはそれだけでは不便なので、魔物が現れた時には小さな鐘が鳴る装置をラストが作ってくれた。小屋の寝床に置いてあるのだが、今夜はそれが鳴っていない。
だから今、波打ち際に立っている誰か。空色の長い髪を夜風に揺らして、呆、と海を眺めている女性は、魔物ではないはず。水晶兎を追いかけてきて、出くわした謎の白っぽい相手に、彼はやっと冴えて来た頭でそう思った。
けれど女性を包む夜の大気は、わずかに紅みをおびかけており、魔になる手前の相手に彼には視えた。
「……君は、誰だ？」
そもそもこんな夜更けに、一人で夜の海を眺める相手は怪しい。知らず、険しい声できいた彼に、薄着の白い礼装の女性はゆっくり振り返った。
「……？」
ぽかん、と海を眺めていた青い眼。それが彼に何の警戒もない視線を向けて、女性は自分の胸元を抑えるように、両手をそっと握っていた。
「……え……わた、し……？」

彼は思わず、息を飲んでしまった。
そこにいたのは、幼げでありながら鋭い眼をして、それでいて表情が柔らかく戸惑う佳人。控え目にいって、翼を広げた白鳥を彷彿とする美女。
「……あんた……？」
そんな相手が、見知らぬ彼を見つめて呼吸を止めた。かすかに青い光を湛える大きな瞳が、まるで涙を浮かべるように潤んでいく。
「あ——……わたし……」
そこでふっと、自身の体を見回すように、空色の髪を揺らして彼女が俯いていた。何かの恐れを抱くように、両手で口元を覆うと、悲愴な顔色を見せていた。
「あ……」
その眼にいったい、何が映っていたのだろう。この時彼が、何も言わずに彼女の言葉を待っていたら、この先の運命は何か変わったのだろうか。

彼女がいつまでも立ち尽くしているので、彼から近付き、つとめて穏やかに声をかけた。

「……君は、誰だ？　こんな夜中に、一人で海岸になんかいたら、海の魔物に取って食われる」
「……」
「あと、空色の毛皮の兎を知らないか？　そうだ、ちょうど――君の髪の色と同じ毛色」
　言いながら、彼自身がはっとしていた。「力」の気配があやふやな点も含めて、まるで水晶兎がヒトになったような者がここにいる。
「えっと……まさか、君は……」
　そこから先は、さすがにすぐには言えなかった。彼もまじまじと、そこにいる空色の彼女を見つめる。

　長い沈黙があった。彼女はずっと、声を出すのをためらっている。そして彼は、体の奥で赤い獣が騒ぎ出す感覚があった。
――多分このこ、レイアスの赤い獣と相性がいい。
　いつも何処かヒトを見透かす、桃花の静かな声を思い出した。
　おそらく彼女は、悲しげな大気を纏うことも同じ、紅い水晶をつける空色兎。けれどそれを、話してはいけない事情があるのかもしれない。
　桃花を追ってきた、というのもどういうことなのだろう。妖精の森から出てきた桃花は、桃花を妖精に預けた実母の許可はある、と言った。ただ妖精達はその意向に反対で、桃花を森からなかなか出そうとしなかったと。

「君は……橘（たちばな）桃花のために、ここにいるのか？」
「……」
　彼女が声を飲んで項垂れる。けれど確かに、こく、と僅かに頷いていた。
　どうにもその姿は、桃花を連れ戻したいようには見えない。それではどうしてここにいるのか、それを彼が、尋ねようとした時だった。
「わたし……他のこと……何も、思い出せない」
　彼の前で、自分の肩を抱く抱いて言った。それでも、彼女は――
「でも、わたし……桃花には、会えない……」
　だから、困っている。それだけしかわからない、と苦しげに彼を再び見つめた。

　よくわからなかった。しかしとりあえず、他には彼も言いようがない。
「だから、兎が、俺の所にいた方がいい？」
「……――」
「君が桃花やあの兎と、どういう関係なのかも、俺には言えない？」
　今度はしっかり、彼女は頷いていた。それはおそらく、言えないというより、言いたくない決意を表すように。
「じゃあ、あのこは後で、うちの鳥籠に帰ってくるんだな？」

「……」
　またも頷く。彼にとっては、水晶兎が無事だとわかれば良いので、これ以上彼女を追いつめたくなかった。
「それじゃ、どうでもいい話でもしよう。どうせ俺も、よく眠れないから」

　ぽかん、と。彼女が顔を上げて、眼を丸くして彼を見つめた。
　そして数秒後に、ほのかに笑った。彼も何故か、高揚しかけていた力が沈んだ。あのままでは暴走の兆しが顕れかねず、自分でも密かにほっとしていた。

　とりあえず、波打ち際では落ち着かないので、彼女の手を引いて入り江まで来た。まだ川岸である所に沢山転がる、大きな岩の二つに二人で腰かけた。
「俺は、レイアス。この海から魔物が来ないよう、岸壁で見張ってる」
　彼女はまた、答につまった。君の名前は言えない？　　と尋ねると、わからない、と返ってきた。
　桃花のこと以外、何もわからない、というのは嘘ではないらしい。自分自身の名前も知らない彼女に、彼は素朴な感慨を伝える。
「別に君が、誰でもいいけど。あんまり夜の外をうろつくのは、お奨めできない」
「……」
「俺だから良かったけど、知らない相手についていくのも良くない。俺だって安全とは限らないから、今後は注意してほしい」
　そこで、ふ、と彼女がまた笑った。砂浜より暗い谷の近くなので、顔はよく見えないものの、続いた彼女の声が明らかに和らいでいた。
「ありがとう。わたし、きっと、貴方以外には会わない」
「――」

　やはりこれは、水晶兎が飼い主を認定してくれたのだろうか。それなら今、話ができる内に、彼らの暮らしの要点を伝えておきたい。
「俺達、もうすぐ旅に出るんだ。ここの番がお留守になるけど、今でも俺達がいるのは惰性みたいなものだったから」
「？」
「俺達、特に俺は、人世から離れて暮らしてきたけど。ここで一緒に住んでる桃花や、それにラストの力になってやりたくて」
「……」
「二人共、実の家族をずっと探してるんだ。ラストは桃花が気になって仕方ないくせ、いつも冷たくされるから何も言ってないけど、自分の双子さえ見つけたら桃花と一緒に生きたがってる。ここにいるのは、桃花の探し相手が多分、ラストの双子と同じ場所に囚われてるからもあって」

　それは彼には、「どうでもいい話」。桃花もラストも、彼とは何の縁もなかった迷子だ。どちらも今では大切な相手で、できれば願いを叶える手伝いをしたいが、究極的には他人事だ。
「でもそれに、タツクを巻き込んでいいかは悩んでる。言い出したのはアイツだけど、タツクは俺のせいで、霊獣の一族から追放されたようなもんだから」
「.....レイアスの、せい？」

　一瞬、背筋がどきん、とした。彼女が彼の名前を呼んだことが、どうしてなのかこそばゆかった。
「タツクは元々、俺達の長の息子で.....霊獣の中では最強だから、俺が暴走した時のために、ここにいるんだ」
　そもそも悪友が、四天王などにつくガラではないこともある。責任感の強い昔馴染みは、自分達の一族から暴徒を出すことを良しとしない。最悪の時には彼を葬ってくれる、とわかっているから、彼ものびのび暮らすことができる。
「俺はいつも、暴走手前でギリギリ留まってる。何かあれば、あっさりこの世から消える。それならせめて、桃花とラストくらいは幸せにしたい」

　今でも彼には、赤い獣の呻(うめ)きが聴こえる。むしろ彼女がいるせいなのか、勢いを増した気配すらある。
　それでも今夜は、いきなりこんな重い話を、いつになく穏やかな顔でしてしまった。彼女が水晶兎であるなら、彼が今後暴走した暁には、迷いなく逃げてほしいからだ。
「俺達霊獣族は、普段は人の姿だけど、本体の『力』が異界にあって。全力を出す時には本体と入れ替わって、獣の姿でここに顕れるから。俺がもしも赤い獣になったら、話は到底通じないし、場合によっては元に戻らなくなる。今までは何とか、自分が誰かを思い出した瞬間、戻れてきたけど」
「.....」
　隣の岩で、行儀よくちょこんと座る彼女は、悲しげな眼になってしまった。赤い獣が現れたら、危ない。それが伝わったということだろう。
　彼も正直、自分の「力」を抑える暮らしに疲れてきていた。だから桃花が、家族を助けに行きたい、と呟いた時、軽率に賛成してしまったのだ。
　お姉ちゃんは、北の四天王の所にいるの、と。普通なら決して敵に回してはいけない、悪魔の一人について明かした時に。

　彼が消えても、困る相手はいない。悪友も彼を見張る責任を終えて、好きに生きられる身になる。もう霊獣の長である必要はないのだから。
　ふう、と。悲しそうな彼女を何故か正視できず、顔を逸らして数秒した後、振り返ると彼女の姿はなくなっていた。

「……？」
　転位の力を使ったような、空間の歪みはどこにも無かった。こんなに近くで力を使われたら、変化程度でも彼にはわかるだろう。
　まるでそもそも、そこには何もなかったかのように。彼が有り得ないものを視ていたというかのように、彼女は消えていたのだった。

　首を傾げながら小屋に戻ると、扉を開けた瞬間、彼のベッドで眠る水晶兎が見えた。
「……とりあえず、生きてる、な」
　昼間とは違い、体が温かくなって呼吸もしている。よし、と撫でてやると、気持ちよさそうに横向きの体を丸めた。
「……！」
　ふっと、開けたままだった扉から、外をふらふら歩く桃花が見えた。こんな時間に、と思ったものの、桃花は危ないものの存在にも目敏いので、まあ大丈夫か、と扉を閉める。
　桃花はいつもの、薄い青味のパーカーを着ていた。この近辺では滅多に見ない、人間界製という空色と白の上着。
「まあ、また明日、見てもらおう」
　空色の水晶兎を、再び撫でた。すっかり眠りこけているので、そのまま彼は同じベッドで、何の気なしに寝付いたのだった。

序

　下界に降りている悪友が、人間の町で北の四天王の情報を探り、帰ってくるまでの間に。水晶兎が加わった彼らの生活は、少しだけ変わっていた。
　水晶兎は、昼間はほぼ眠っている。代わりに夜によろよろ起きて、まるで四肢が軽く麻痺しているように、ぎこちない動き方を見せる。彼が運んで移動させてやらないと、窓辺の鳥籠から水を浴びに炊事場に行くだけでも時間がかかる。
「なー、レイアス。最近桃花（とうか）、ホントに調子悪そうなんだけど、どうなってんのかな？」
　ラストが心配そうに、森で集めた木の実を彼に分けながらぼやく。
「聴いてもいつものあの調子で、アナタには関係ない、ってバッサリでさぁ。何で桃花、オレにはあんなに冷たいんだよ？」
「……」
　彼にすれば、桃花の反応はとてもわかりやすい。元から無愛想ではあるが、まず他者にあまり興味のなさげな桃花が、ラストにはいちいち突っかかること。気付いていないのはラスト自身だけだ。

　それに引き替え、と。ラストが彼の山小屋で、ベッドにもたれて床に座りながら、納得がいかない、と鳥籠を掃除する彼を見上げた。
「レイアスはそいつを飼ってから、すっかり丸くなっちゃってさー。『力』は今まで通りいつ暴走してもおかしくないのに、メンタルは落ち着きまくっててアンバランスっていうかさー」
　ラストは彼に、暴走予防の対策として、「力」を抑える片耳だけのイヤーカフをくれた。人里でも様々な道具を売って、今や彼らの稼ぎ頭である少年には彼も頭が上がらない。
「桃花はそんなに、体調が悪そうなのか？」
「っつか、毎日こっくり、しょっちゅう船漕いでんの。昨日の夜なんてお茶わかしたまま、食卓で眠っちまってて、オレが干し肉持ってった時に気付いたから良かったけどさー」
　そうなのか、と彼も思わず苦く笑う。桃花は何事もソツなくする方なので、ラストが心配するのはよくわかった。

　昨夜といえば、彼は再び、空色の髪の彼女に出会っていた。
　赤ちゃんのようにしか動けない水晶兎が、窓辺の鳥籠から消えたと思えば、岸壁に彼女が立っているのが窓から見えたのだ。そうやってたまに水晶兎が姿を消して、その都度彼女が顕れることが何度も起こった。

「君は、どこか、悪いところでもあるのか？　体調がおもわしくないなら、君さえ良ければ、山を下りて医者を探すけど」
「.....」
　無言でふるふる、と彼女は首を横に振る。彼は仕方なく、困ったように笑うしかない。

　水晶兎も彼女も、いつも長く動くことができない。水晶兎はすぐに眠ってしまい、彼女はいつの間にか消えてしまう。彼以外の前では、まずどちらも、動く姿を誰にも見せることがない。
「これ、俺だけが視てる幻想ってことは、あったりするのか.....？」
　一応水晶兎そのものは、ラストにも桃花にも寝姿は見せられている。しかし目を覚ますのは彼しかいない時だけで、ホントにこいつ動くの？　とラストは不思議そうに優しくつついている。
　桃花はその点、スパルタだった。甘やかさないで彼が兎を起こして、体を鍛えさせろ、とすげなく言うのだ。ラストが心配する体調不良は、全くなさそうな気丈な声で。

　わたし、貴方以外には会わない。彼女が本当に水晶兎であれば、その言葉を忠実に守っているように見える。
　それでも彼は、何かが釈然としない。そもそも桃花を避けたがっていたのは彼女で、他の者も危険とは誰も言っていない。何故彼の元を選んで、水晶兎は安心そうに眠りこけているのか。桃花を追ってきたというが、近くに潜んで何をしたいのだろう。
「そもそも桃花が、謎だらけだしな.....」
　どう視ても「力」なき人間であるのに、有力種の妖精の森に預かられていた桃花。妖精とは遊び心ばかりで、妖精の元に他の種族が行くと、酷い時には人格まで変容するという、「妖精の取り替え子」の言葉があるほど異端な種族だ。
　桃花は親元にいた時には、もっと大人しくて人見知りだったらしい。ここに来てからは匿われている身なのに、誰にもスパスパ物を言って、何だかんだ周りを動かしている。言うことは正しいので全員唖然と従うのだが、悪友などは「何でおれら、使われとるんや.....？」とたまに正気に返る。
「.....まあ、そういうところが、いいと思ってるけど」

　水晶兎が鳥籠で眠る窓の外に、薪当番であるラストと、運ぶのを手伝う桃花が見えた。いいよ、とラストは言っているのだが、一番使うの私だし、と桃花は無愛想に精一杯の量を背負う。
「ああいう時は、素直じゃないけど」
　非力なので、山を行く水汲みや獣狩りをさせられない桃花は、小さな薬草畑を管理している。この里の土壌では人間向きの野菜や穀物は育てにくく、薬草を売ったお金で桃花とラストのために、彼か悪友が主食を買いに下りる。

桃花は今のように、ラストの仕事を進んでよく手伝った。頼りないから、と理由を言っているが、あれ、一緒にいたいんやろな、という悪友の言に彼も賛成だった。

悪友が人の町から帰った日に、桃花が熱を出した。薬湯を飲んでも熱が下がらず、医者に見せるために四人で山を下りることになった。
彼は起きない水晶兎の鳥籠を持っているので、帰ったばかりなのに桃花を背負う悪友は、また町に出るんか、と溜め息をついていた。
「なんかなあ。桃花はこない無理して、山奥に住むことないやろ、っていっつも思うわ」
彼らは初め、逃げて来た桃花を人の町に送る、と何度も説得した。けれど桃花は、ここにいさせてほしい、の一点張りだった。人間は足手まといなんだ、とあえてラストがきつく言った時に、最初で最後の涙を黒い目に滲ませた。幼気(いたいけ)な少女の涙には誰もが弱く、なしくずしに四人での山小屋生活が始まることになった。

彼と悪友は、「もう一つの己」と呼ばれる霊体の獣を駆使する霊獣族だ。加えて悪友は、自身の霊獣に従う大量の普通の鳥を操り、山小屋の付近は舎弟の鳥達に見張らせて全員で人里に降りた。
ちょうど良かったかもな、と悪友が宿で言った。強い薬を打たれてベッドで眠る桃花を横に、三人で今後の相談に入った。
「胡散臭いけど、今回おれ、前代魔王の息子っちゅー奴に会うたんやわ。ソイツによると、今の北方四天王は確かに、様々な後継ぎ候補を城に入れて育てとるらしい。各地で滅ぼされた千族(せんぞく)の末裔もおるっつー話で、特にここらは北の島から結構近いから、ラストの双子もそこに攫われた可能性がマジで高なってきたで」
あまりに悪友の話が突飛だったので、彼もラストも耳を疑った。しかし悪友がそれを躊躇いなく話したのは、同じ話を過去に既に、桃花がしていたからだった。
「ここまで話が一致しよると、桃花の与太話やって、もう笑うてられへん。そもそもラストの里が滅ぼされたことも、おれらの里が西の配下に入ったことも、そうそう知られてへんはずやのに桃花は知っとったしな.....」

そこで、ガタン、と窓辺から音がした。あ、と彼は、癖のように置いていた鳥籠の元に行った。
「珍しいな、起きたのか？　ほら、ちゃんと動くだろ。タツク、ラスト」
よたよた、と鳥籠から出てきた水晶兎を、囲んでいた茶卓に置いた。おおお、と悪友が小さな頭を触り、ラストも目を丸くして見つめる。
「こいつ、やっぱり招魂か使い魔じゃないかな。自分だけじゃ動けない感じ。でも、術者は.....」
「つながりは特に、何処にも視えないけど」
だよな、とまたラストが項垂れる。水晶兎はちょこん、と首を傾げる。

　無言の水晶兎が加わった中、彼らは改めて相談を続けた。
「桃花の姉やんと、ラストの双子が北におるっつー話やけど。最初に聴いた時はまさかて思うとったけど、桃花が言うこと、他のも大体当たっとるもんなあ」
「もういいよ、タツク、充分助かったから。オレやっぱり、一度北の城に行ってみようと思う」
　ラストは今回、旅の準備をかなり整えて山小屋を出ていた。悪友に先に、今の話をあらかた聴いていたのだ。
「アホう、オマエ一人で行かせるわけにいかへん。危ないやろが！」
「でもタツクとレイアスにはうちの事情、何も関係ねーじゃん？」
「いっぺんでも一緒に生活したら家族やねん！　　うちの里からごっそりヒト引き抜きよった四天王が、どんな奴らかはおれも知りたいしな」
　暑苦しい悪友は昔から人情家で、彼はどちらかといえばオマケでついてきた気分だ。それでもラストや桃花の力にはなりたいので、成り行きに任せてこの場にいる。
　ふっと、さっきまでうなされていたのに、寝息が静かになった桃花のことが気になっていた。体が楽になったから、なら良いが。

「とりあえずその話聴いてから、おれの鳥をいくつか北に偵察に行かせとる。なんやディアルスっちゅー国ならもっと四天王とか詳しいってきいたから、くだんの『千族狩り』の国やけど、腹決めて一度訪ねてみるか？」
　そんな所まで出るのか、と彼は、水晶兎を撫でながらぼけっと聴いていた。帰る頃には山小屋周囲は、海からの魔物に侵蝕されているかもしれない。
　「千族狩りのディアルス」は、人の姿をしながら人ならぬ「力」を持つ化け物千族達を、個体数が減って来たので集めて保護している、と桃花に教えられた。しかし巷では「千族を狩っている」などと悪い噂が強い。

　結局、桃花が起きたら、山小屋に帰るかディアルスに行くかをきいて、帰ると言うなら彼と帰らせよう、ということになった。その場合は悪友とラストが二人で、千族狩りの国に出て行く。
「.....俺と二人って、ある意味危ないと思うんだけど」
　彼は今でも、いつ内なる赤い獣が暴れ出すかわからない身だ。だから何も、特別な望みも意志も持たないように日々を過ごしてきた。感情が動くと身の内の「力」も揺らぎ易く、心を平坦に何事も傍観者であろうとしてきた。
　今日はよく起きている水晶兎が、机に置いた彼の腕にすり寄ってきた。二人じゃないよ、と言われたようで、思わず苦い笑みがこぼれた。

桃花の二つ上の実の姉が、北の四天王城で後継ぎ候補にされている。彼らの中で暮らすようになってほどなく、桃花は悩みを打ち明けていた。ただの人間に視える桃花の、年端もいかない姉がどうしてそんなことに、と彼らは半信半疑で聴いた。
いつも多くを語らない桃花が、自分のせい、とだけ言った。そんな桃花は、おそらく山小屋に帰るよりも、ディアルスに行って四天王について調べることを望むだろう。彼はそう思いながら、床の敷物の上で毛布をかぶった。四人で一部屋を借りて、ベッドは二つしかなかったので桃花とラストに譲ったのだが、ラストは起きている間、ずっと桃花の看病をしていた。

誰もが寝静まった夜更けに、彼はふと、鳥籠が開く音がした気がして目を覚ました。
「――」
水晶兎がいない。ということは、と、もぞもぞと床をはって一人で部屋を抜け出す。
彼が予想した通り、屋上に空色の髪の彼女が佇んでいた。長い髪と共にいつものひらひらとした白い礼装を、冷たい夜風に軽くたなびかせていた。
「……どうしたんだ？　浮かない顔して」
「……」
予想と違うのは、明らかに沈んだ雰囲気の彼女だった。彼が来たことには気付いているのに、暗い町の夜景を眺めながら振り返ろうとしない。

夜が深まる。屋上の縁に手をつく彼女が、青白い月に照らされている。
どうしてだろう。こんな日がいつかにあった気がした。けれどそれは、彼も彼女も失ったもの。ここにいるのは、本当はあってはいけなかったもの。
彼女の悲しげな背中が訴えてくる。運命の選択がここにある、と何かが囁(ささや)いていた。彼女はやがて、町を背にして、悲しげな顔でゆっくりと振り返った。
「……？」
「……ゴメンなさい。わたし……」
ふわふわした声色でも、眼の色は暗い青に染まった彼女。未だに彼以外には姿を見せない彼女は、水晶兎と同じ空色の髪をふわりとかきあげる。
「わたし……」

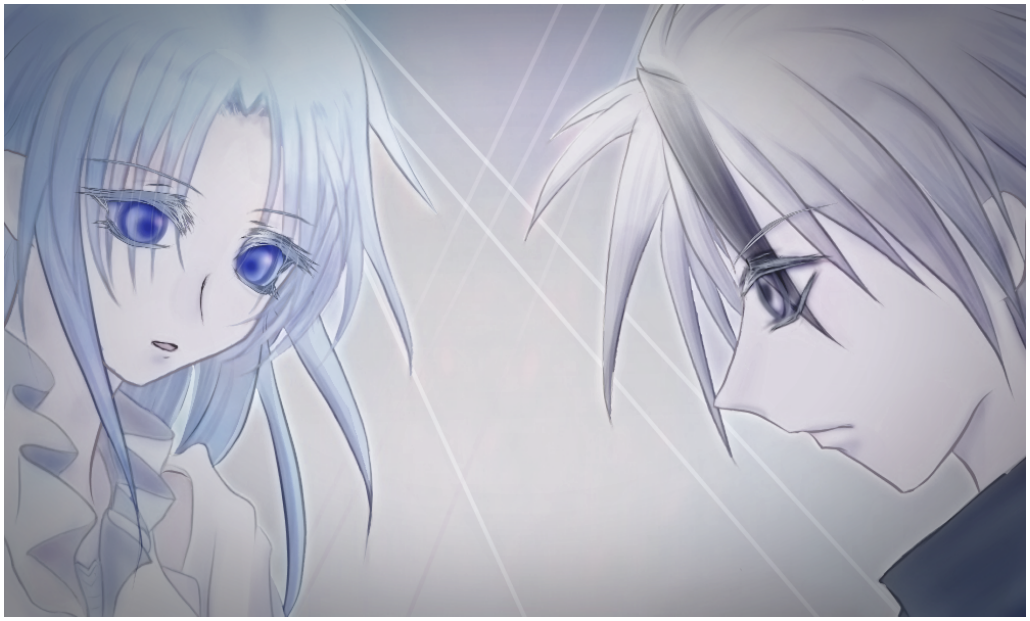
そうして彼女が、何かを口にしかけた直後だった。
「――待ちなさい。貴方達、二人共、とても不秩序」
入口側の彼と屋上の端の彼女の間に、外套に身を隠す娘が降り立っていた。彼女がはっと両眼を見開き、娘はそんな彼女にまず掌底を向ける。
「――」
凍らせる気か。見知らぬ娘の「力」が発動前に視えた彼は、咄嗟に背後から娘の外套を掴むと、乱暴だとは思ったものの、自身の気を叩きつけた。

「！？」
　彼の「力」を構成する気は、赤い獣と同じ火属性だ。対して外套の娘は彼女を凍らせ得る青い炎――「熱を奪う力」が視えた。咄嗟に叩きつけた彼の火の気は、熱を司る娘には大過ないはずで、気を失うだけに留まっていた。
「.....」
　彼女は呆気にとられていた。彼自身も、娘がとても強い、と感じて咄嗟に体が動いた。ずれた外套の頭巾からは、年端もいかない娘の黒い髪が出ていた。
「.....悪い。やり過ぎたか？」
　彼女はまだ、屋上の端でこちらを見ている。倒れた娘を見る眼が心配そうで、彼もバツの悪い思いになった。
「.....びっくりしただけ。でも、見つかったら、わたしは困るから.....」
　だから、ありがとう、と。ようやくこちらに寄ってくると、娘のそばに跪いた。

「.....――」
　彼女が倒れる娘の頭巾を戻す。その瞬間、彼は何故か、彼女の空色の髪が紅(あか)に染まった錯覚を視た。
　すぐに空色に戻った彼女は、暗い青の眼で困ったように笑う。続いて静かに、こういうこと、と両眼を伏せていた。
「わたしの願いが.....みんなを傷付ける」
「――え？」
　いや、と彼は、自分の行動の是非も含めて強めの口調で言った。
「先に襲ってきたのはコイツだ。どう見ても君を捕まえる気だったし」
「.....」
　娘は彼らを、「不秩序」と言った。意味は全くわからないが、彼女が片付けば次は彼の番だっただろう。
「.....そうだね。二人共危なかったのは、確か」
　人間の都市に混じった化け物の彼らを、この娘は捕らえにきたのだろうか。娘自身は強い「力」を持ちながらも人間に視え、彼らを怪しんでも無理はなかった。
　彼自身も、赤い獣という抑えのきかない激情を持つ。利害の合いそうにない相手と、冷静に話ができる自信は元よりなかった。彼女の悲しげな瞳に映る血走った双眸の彼は、倒れた娘と同様憐れまれているように見えた。

　彼女がそっと、彼の頬に冷たく細い手を当てた。
「.....間に合わなかったの。悪いのは、わたしなの」
　彼は軽く、顔をしかめる。夜より玄い大気を纏う、悲しげな彼女を見つめ返す。
「でも、これ以上引き延ばすと.....アナタも消える」
　そこで一際、苦しげに笑うと、そのまま夜の闇に融けてしまった。彼のそばには、気を失った外套の娘だけが残った。

「……っ」
　急に強い力を使ったので、彼の内でも今更赤い獣が暴れ出した。胸を抑えて呼吸を止めて、獣の呻きが鎮まるのを待った。
　喉の奥で焦げた匂いがした。右手の下からはかすかに煙が上がっていた。



　水晶兎の姿も見つからないまま、仕方なく気絶した娘を抱えて部屋に戻ると、部屋ではちょうど、桃花が鳥籠の扉を閉めたところだった。
「なんだ。帰ってたのか、そいつ」
　鳥籠の中では、水晶兎がちんまり眠っている。桃花にも動いてるところを見せられた、と何となくほっとする。
「桃花は、起きてて大丈夫なのか？」
　下がらない熱で倒れていたはずの桃花は、まだ赤味のある顔でこくり、と頷く。彼が抱えて来た娘を見て、大きく細い溜め息をついた。
「……見つかっちゃったか」
「え？」
　もう自分はいいから、と、桃花が外套の娘をベッドに寝かせた。ラストは一度眠るとなかなか起きず、悪友も豪快にいびきをかいて寝ている。

　彼の火の気を受けたので、熱っぽい体で眠る娘に、桃花が濡れタオルを乗せた。
「このヒトは、鴉夜（あや）。私の従兄の連れ合い」
「……え？」
「私を連れ戻しに来たんだと思う。でも私は――咲杳（さくら）と一緒でないと」
　やはり桃花は、黙って山小屋に帰る気はなさそうだった。それにしても、黒い髪と目で素朴な顔立ちの桃花と、外套から顔の出た黒髪の鴉夜は、鋭さが似て視えた。

　桃花の知り合いだというが、娘が言った「不秩序」は、どういう意味なのだろう。尋ねたかったが、今は桃花も休ませないといけない。

　桃花がふう、と壁にもたれて座り込んだ。大丈夫か、と彼が自分の毛布を渡す。
「いい。まだ熱いから……」
　旅用の自身の外套にくるまり、床に転がると猫のように丸くなった。せめて使え、とベッドから枕を渡す。頭の下に敷いてやると、赤い顔でふわりと笑った。
「……レイアス達は、みんな、優しいね」
「桃花は気丈過ぎだろう。人間なんだから、もっと弱くてもいい」
　少し熱が出たくらいで、行動に支障を来たす生き物。桃花が大事にしている水筒も、枕の近くに置いてやった。ラストが桃花のために、比較的初期に作った竹の筒で、見た目より水を入れられる上に軽い。ありがと、と桃花がまた微笑む。

　きっとこの時、桃花の熱はまだ相当高かったのだろう。段々と胡乱になっていく目に、不意に、じわりと涙が滲んでいた。
「……わたし……まだ……」
「――」
　その弱々しい声は、まるで先刻、消えそうに悲しげだった彼女のようで。彼が言葉を呑んだ沈黙の後、すぐに桃花は寝付いてしまった。
　みんなを傷付ける、と。閉じた目からの涙の一筋が、何故かそう語っているように思えてならなかった。

　気を失った娘を見張りながら、彼はその後、一睡もできずに全員の寝息を聴いていた。意識を落とせば赤い獣が暴れ出すと、確信できるほど灼熱が体を駆ける。ここまで続くことはこれまでになく、もう駄目なのかもしれない、と朝方に思った。
　壁を背に座り込む彼の前で、悪友、ラスト、桃花の順に目覚め、宿を出る時間になっても起きない灰色の外套の娘を、桃花が無言で起こしにかかった。

　くしゃくしゃになった外套を着たまま、起き上がった娘は寝台の上で大きく首を傾げた。
「橘（たちばな）桃花……どうしてここにいるの？」
　脱げたままの頭巾は戻さず、警戒心が明らかに薄くなった。桃花の指示で、水晶兎の鳥籠だけは、何故か娘の視界に入らないようにベッドの陰に隠した。
「鴉夜。鴉夜こそどうして、炯（けい）と別行動をしているの」
「それは……え……あれ？」

はた、と鋭い黒の眼を丸くして、鴉夜が困ったような顔になった。彼にはそれが、空色の彼女が昨夜に鴉夜の頭巾をずらした時に、頭越しに力をかけたのだろうとわかった。おそらく何か、記憶操作の類の魔術。
空色の彼女は何者なのだろう。水晶兎を見せてはいけない、という桃花も、水晶兎と空色の彼女を実際知っている気がしてならない。

昨夜のことを、彼の存在も含めて忘れている鴉夜に、桃花はあえてそれ以上何も追及せずに話題を変えた。
「紹介するね。このヒト達に私、今、お世話になってるの」
「お世話に、って.....貴女、妖精の森を出て、何処に行くつもりなの？」
とりあえずそれは、道々で説明する、と。宿の退去時間が迫っていたので、鴉夜を促し、先に部屋を出させた桃花だった。

ラストの機転で、水晶兎の鳥籠を桃花のリボンの中に隠した。ラストが作った桃花の紅いリボンは、魔除け効果がある上に中に様々な物を入れておける特殊な法具なのだ。入れられる数と概念は五つに決まっているため、鳥籠の代わりに旅荷物のリュックを背負った桃花は、一行の最後尾を歩きながら鴉夜と話していた。
彼もラストも悪友も、普段よりかなり遅く山道を行きながら、後の二人の会話を横耳できく。
「咲杏が北方四天王の所に行ったなんて、初めて聴いたわ。貴女、本当にそんな所までこのヒト達と行くつもり？」
「疑うなら、炯にきいてくれたらいい。ついてきてもいいけど、咲杏が本当に四天王の所にいても、鴉夜には討伐権限はないよね」
う、と鴉夜が黙る。鴉夜の方が年上に見えるのに、桃花のことは苦手なようだった。

桃花曰く、鴉夜は「自身の意味に反する不秩序者」を管理する役目を持ち、日頃は主に堕落した信仰者や妖怪崩れを始末しているとのことだった。
後ろの話を耳にしながら、ラストが彼の横で不満げに口にした。
「でもさぁー。オレ達はともかく、桃花まで四天王のところに行くのは、さすがに無茶だろ？」
彼らも誰もが思っていたのだが、旅荷物一つでも歩くのが辛そうな桃花は、いつものように冷たく言い返してきた。
「どうして四天王城で暴れること前提なの。私はただ、咲杏を迎えに行きたいだけ」
「っても、後継ぎ候補なんだろ？　　そう簡単に帰してくれるわけ.....」
彼も同感で、桃花さえ傍にいなければ、強大な悪魔と命がけの戦闘になっても彼は良かった。気になっているのはその点と、あともう一つだけ。

「それに、ミストもそこにいたら、オレは平和的な交渉とかとてもできない」
　彼より一回り小さいラストが、体と同じくらいの長物を背に不服気に言った。普段は小物に変えている武器を、いつでも使えるように背負っているのだ。

　獣道には慣れているのか、颯爽としている鴉夜の隣で、体調の悪そうな桃花の顔が曇った。
「.....ラストは、絶対、北に行かないといけない」
　そもそも、ラストの双子が北にいる、と告げたのは桃花だった。どこからそんな情報を得たのかきいても、手遅れになる前に、と話を濁すばかりだった。
　とにかくラストをメンバーから外すわけにはいかないが、連れて行くと事態が不穏になることもわかっている。そんな苦しげな桃花に、彼も同感だった。

　四天王とは、この世界の監獄を司る悪魔のことだ。悪魔といえど世の秩序を守る側で、そこに乗り込んでいくとすれば、彼らは咎人となる可能性が高い。
　鴉夜もまさにそれが不可解なようだが、桃花の出自を知っているらしく、気になる言葉を残してその後に一行から離れていった。
「橘家に確認してからまた来るわ。四天王が関係する事なら、あのヒト達が動いてないはずはない」

　そうして鴉夜が去った後に、無表情でも真っ青になった桃花の様子に、ラストが慌てて休憩しよ！　と敷物を取り出していた。
　木陰で桃花は横になって、寝付いてしまった。桃花のリボンから水晶兎の鳥籠を取り出し、代わりに荷物を戻して、ラストが眠る桃花に自分の外套をかけた。そんな姿を見ながら悪友が溜め息をついた。おそらく全員の思いを代弁して。
「なんや知らんけど.....橘家っつーのが、止めてくれるとええな。桃花のこと」

破

　ディアルスに着くまで、水晶兎がずっと鳥籠の中にいたせいか、空色の彼女が現れることはなかった。旅荷物の代わりに籠を引き受けた桃花(とうか)が抱える中で、起きてはきょろきょろ道中を見回している姿がよく見られた。
　「千族狩りのディアルス」では、桃花の幼馴染みという妖精の魔女が一行を出迎えた。魔女は現在、ディアルスの王女に専属で仕えているとのことで、桃花に姉やラストの双子の情報を伝えたのはこの魔女だという。
「凪(なぎ)様からもまた、言伝を預かってるわ。隠れて動きたいのは知ってるけど、いつまでも私を使うのはやめてくれる？」
「ごめんなさい、ナナハ。父さんにだけは、知られたくなくて.....」
　魔女は彼ら全員をバックアップするという。それはどうやら、桃花の母からの指示で、桃花がこれまでで一番悲しそうな顔をした瞬間だった。

　まさか王城に匿ってもらえるとは、桃花以外の誰も思っていなかった。鴉夜(あや)に見つかる時間も稼げる、と桃花はソファの前でテーブルに地図を広げて言った。
「四天王達は、魔王の尖兵。ここ数年でラストの里を滅ぼして、レイアス達の仲間を引き入れて、ディアルスでも闘技場まがいの見世物をしてる。もっと前には、天の守護者の拠点を制圧してしまった。これから何をするかわからないから、王女は魔王からの内偵を、逆に利用して情報を得ているの」
　たはは、と、一行とは逆のソファに魔女と座る金髪の騎士が頭をかいた。機嫌が悪そうにする魔女の横で、腕を組みながら開き直る。
「相変わらず桃花ちゃんには、敵わないねぇー。うちの情報王女に吹き込みまくった巫(凪)女様も大概恐ろしいけど、桃花ちゃんは更に上行ってね？」
　唖然とする彼らに、騎士はディアルスと四天王の冷戦を伝える。土地的に西と北の四天王に囲まれているディアルスは、ちょうど同じ四天王に私怨がある彼らと利害が一致する。桃花の母がそのように王女を説得したらしい。

　北の四天王が城を構える小島の地図を見て、どう乗り込むかの相談の前に、悪友が心から不思議そうに尋ねた。
「桃花の母ちゃんは、桃花を北に行かせるつもりなんか？」

母という存在が絡んでいるなら、普通は止めるだろう。それがむしろ、桃花の行動を後押ししている。そんな根回しができる立場なら、桃花の姉を母が自力で取り戻す算段もできそうなものを。
桃花は俯き、答えなかった。元々無表情だが、山小屋を出てから桃花の笑顔が全くなくなっていたのを、彼はふと思い出していた。

あっという間に、北の四天王城への侵入計画が実現味を帯びてきた。ディアルスが国として彼らにつくなら、大きな外交問題に発展するはずであるのに、彼らが本当に身内を連れて戻ってくるなら、自国者の保護目的として対抗するつもりだという。既にディアルスでの戸籍も作られているそうだった。
「要するに、ミスト達を助けられなきゃ、オレ達の独断テロってことにされそうだけど」
二段ベッドの下で自作道具を広げながら、面白くなさげにラストが言う。魔界の王の部下でもある四天王相手に、まさかこんな大国の後援があるとは思わなかった。ディアルスと四天王が元々敵対しているなら、利用されている面もあるのだろう。
桃花と水晶兎は一人部屋に、彼らは兵舎の一室に押し込まれた。悪友も二段ベッドの上で、不満はありそうだが言う。
「それでも今の北は、後継ぎ探しするくらいお家崩壊の危機やっちゅーから、多少何かあっても魔王サンはかばわんやろっておれの情報元も言うとったわ。こんだけお膳立てがあれば、ここまで来て行かない方が有り得んわな」

あえて言わないが、本当にラストや桃花の家族がいれば、彼は四天王と刺し違えてもいい覚悟でいた。いざと言う時は四天王城への侵入の咎も、彼一人の凶行として処分してくれ、と魔女にこっそり伝えた。
この道中で、彼は幾度も、赤い獣の叫びに呑まれそうになった。彼の不調を察した目敏い桃花が、こっそりそれを魔女に相談してくれたので、魔女と二人で話せる機会があったのだ。

魔女は、彼を診てからこの部屋に送る前に、納得のいかない顔で彼の背に問いかけていた。
「……稀少な飛竜の担い手だと、桃花からもきいていたけど。貴男はその力、抑えることしか考えてないのね」
妖精なのに魔女である女には、莫大な魔力の色が視えた。彼も霊獣としては気が豊富な方であるが、魔女は彼とは違い、生まれながらの大きな力を何が何でも克服してきた風に見えた。
「別に……俺がいなくても、誰も困らないから」
彼は自身の赤い獣が、何かの役に立つと思えなかった。強いて言えば、四天王と対峙するなら、こけおどし程度はできたら良いが。

彼の答に不満げながら、魔女が続けたのは、桃花を守って。それだけ言うと、踵を返して去っていった。
「……いいけど。守るなら、行かせない方が良くないか」
どうして誰も、桃花というただの人間が悪魔の城へ行くことを止めないのだろう。その違和感がついてまわる。

類稀な魔力を持つ魔女のおかげで、彼の右腕に力の暴走を抑える印が刻まれた。細々と前腕中を埋める黒い幾何学模様に、今晩はやっと落ち着いて眠れそうだ、と肩を下ろす。
部屋に入ると、ラストも悪友も寝ていた。彼も床に入ろうかと思ったが、何故か、誰かに呼ばれたような気がした。それはこの城に足を踏み入れてから、何度となくあった不思議な錯覚だった。
「……？」
彼らのいる兵舎は大半が、城の外壁に沿って内側にある。部屋の外に出ると城の跳ね橋に続く中庭になる。見張りの兵士に怪しまれるかと思ったのだが、それでも夜の空気に触れた瞬間、また、誰かに呼ばれた気がした。
「……お前、か？」
深夜の城外を歩き回っているのに、誰にも咎められる気配がない。これは誰かが、彼を隠す目晦(めくら)ましの魔術を使っている。ディアルスの空気とは違う紅(あか)がそこかしこに混じっていた。
紅が段々濃くなる方へ、彼は元を辿った。その先にあったのは意外にも、小さな噴水のある一画で、水晶兎と共に石段に座る桃花の姿だった。
「――え？」
「……」
明らかにおかしな魔術を追ってきたのに、いたのは桃花。桃花にこうした人外の業は扱えないはずで、代わりに隣の水晶兎が、桃花といる時は最も動物らしく身軽な動きを見せて、彼の肩に跳び乗ってきた。

外壁の灯りがさすだけの暗い場所で、紅いリボンを外して髪を下ろした桃花と見つめ合った。この場のおかしさを尋ねたいのに、どうしてなのか声にならない。
そんな彼を何処まで感じていたのか、桃花の方から話し出した。両手でリボンをいじりながら、苦しい微笑みを浮かべて。
「……良かった。母さんの言う通りだった」
「――え？」
「レイアス、迷ってる。……わたしと一緒」
「……？」
桃花が彼から視線を外す。水晶兎が彼にすりすりと頬を寄せて、右腕を持ち上げると嬉しそうに、前腕の上までとことこと肩から降りてきた。刻まれた印の上を小さな体でバランス良く歩き回る。

　桃花が暗い夜を見上げた。水晶兎も彼の肩に戻り、桃花と同じ夜空を見上げた。
「……ねぇ。今まで通り、ずっとみんなで……あの山小屋にいられないかな」
「……桃花？」
「こうしてディアルスに時々来て、レイアスを診てもらえば。……ラストもわたしも、こっちを選べば……これから……――」
　そこまで言うと、はっ、と。水晶兎の視線に気付いて、桃花が声を止めた。
　いつの間にか、水晶兎は桃花を見ていた。とても悲しげな蒼い眼色で。

　言葉を止めてしまった桃花に、脈絡もなく胸が痛くなった。桃花が何を言っていたかはわからないのに、言わなければいけない、と不意に想った。
「それは……ラストと桃花が家族を取り返してから、叶えればいい」
「……」
　桃花は多分、彼の腕に刻まれた印に安堵している。魔女に彼のことを頼んだのは桃花なので、暴走の懸念が一時弱まって嬉しいのだろう。ラストも桃花も、悪友から彼の状態は聞かされている。
　けれどそれは、根本的な解決ではない。これから先に、魔女に何度印を刻み直してもらっても、彼が周囲を壊し得る獣であることは変わっていない。
「桃花の事情は、何も知らないけど。ラストは絶対、諦めないだろ」
　彼らの前に現れた時から、紫苑の髪を持つ少年は蒼い目に決意を湛えていた。少年の里を滅ぼした悪魔が、おそらく大事な双子を捕らえているから、必ず助け出すことを。

　桃花が俯いた。リボンを握りしめて、体を震わせている。
「……知ってる」
　水晶兎が肩から降りて、桃花の方へ戻っていった。石段に座る桃花の腰に、そっと静かに体を寄せる。
「今、見捨てたら……ラストは全部失ってしまう」
　だから先程、桃花は自分の声に息を呑んだ。言ってはいけないことを、口にしてしまった。今この時の、束の間の夢がどれだけ温かくとも、その先には何もないと。
　彼には全くわからないこと。けれど誰にも止められない桃花の望みは、桃花自身ですら抗えないもの。それが今更、夜の闇と共に伝わってきていた。たとえその黒の両目に、紅いリボンをくれた蒼い目の少年が映っていても。

　ふっと。不自然な笑みを浮かべるという、珍しい形で桃花が表情を消した。
　片手にリボンを持ちかえると、噴水から立ち上がって近付いてきた。足元には水晶兎がまとわりついて。

「――桃花？」
「……視えてるよね、レイアス。このままじゃ……アナタがいなくなること」
　それは、と喉元で言葉に詰まった。
　今、桃花と話さなければいけないこと。あえて逸らされた心を映す偽りの笑顔に、彼はせめてもの反撃を試みる。
「俺がいなくなるより、もっと大事な話。あるだろ、桃花」
　桃花がまた、無表情になった。
　否定をしないで告げた現実。誰かが桃花を、止めなければいけない。
　それができるのは、桃花も迷った今だけなのだ。けれど桃花は、その先にある終わりを知るように口を閉ざしてしまう。

「桃花が望むなら、ラストに桃花を里まで送らせる。北の城には俺とタツクだけでいく」
「――」
「それじゃ駄目なのか？　　二人の家族は俺達が助ける。それが無理なら桃花とラストだけでも、俺達は幸せに暮らしてほしい」
　ここしか落としどころは無い。ラストは桃花のためでもなければ、四天王の城行きを断念しない。逆に言えば、桃花を止めるためなら、ラストを説得できるかもしれない。
　タツクは納得してくれるだろう。タツクに託せば、桃花とラストの家族は助けられるのではないか。彼が囮に暴れて、タツクが奪回に徹せば、一握りの可能性は――
「俺がいなくても――桃花は幸せになれるんじゃないのか」

　気付けば桃花の右手を、持っているリボンごと掴んでいた。今夜は月がない、と今頃彼は暗闇で思う。
　呆然と見上げる桃花の下で、水晶兎が彼を見上げていた。その額の紅い水晶が、ふと玄(くろ)く光って見えた。

　ヒト型の化け物とは違い、色――「力」の乏しい人間の桃花。
　暗い夜に消えそうな黒を、かすかな闇で揺らがせながら彼を見つめる。
「アナタは、視えているくせに……知らないから、そんなことが言える」
　震えた声色。桃花を止めようとした彼の、彼も知らない心を映す目。
「もしも私が……わたしだったら……」
　言葉が止まった。桃花はしばらく、想いの底を探すように足元の水晶兎を見ていた。兎の水晶は紅く戻り、何をも思わぬように桃花を見返していた。
「……ごめん、なさい」
　もう手を放していた彼に、顔を上げずにそれだけ伝える。
　そのまま水晶兎を抱き上げると、桃花は与えられた一人部屋へ、城の内に戻っていった。

　何も言えずに、夜に取り残された彼は。
「……君なら、知っているのか？」
　彼が桃花を離した理由。先刻から感じていた彼女の気配に、振り返らずに暗闇に向かって問いかけた。
「どうして桃花は、行かなきゃいけないんだ。……桃花自身では、できるわけがないことなのに」
　咲杏（さくら）という姉を助ける。大事な目的だとはわかる。まるでその増援を探すために、同じ城にいる誰かの家族、ラストに近付いてきたかのように。
　それは良かった。弱小な人間が化け物を頼り、大切な相手を助け出すこと。この数年の共同生活は楽しかった。ヒトを傷付けるだけの彼を慕ってくれた者達のためなら、彼は命がけで挑む。桃花の存在は足手まといですらあると、わかっているだろうに。

　彼の背後で、暗い闇の中に顕れた空色の彼女は、ただ悲しげな大気を背負う。
　まだ彼の姿は闇に隠されているのだろう。警備の兵士達に気付かれることがない。
　この目隠しをかけた者だろう彼女は、ようやく彼に青く潤む視線を向けて笑った。
「……貴方は、何でもできる。そう思ってる」
「――」
「そう。貴方には、できてしまうから。わたしが視える貴方には……貴方の思う通り、桃花を助けることだって」

彼以外の前に、姿を顕さない空色の彼女。桃花の隣では軽快に動く空色兎。
彼女達が言うように、彼にその繋がりは視えつつあった。
「君は……桃花の『力』なのか？」
気配も色も、力無き人間のはずの桃花。もしもそこに「力」があるなら、その業は起こされてよいものだろうか。
「桃花は何を、望んでる？　君は桃花を――どう助けたい？」
彼女が言う「助ける」の意味。「貴方の思う通り」とわざわざ言ったのは、彼の思いと、彼女の桃花への思いは違うからに感じた。
彼女はずっと、苦しく笑う。自分がみんなを傷付ける、と以前に言った。
力無き人間に「力」が起こるとすれば、魔の業か聖霊の導きのどちらかが多い。どちらにしても宿業か使命ありきの魂の束縛で、それがまだ幼い桃花にとって、幸せなこととは彼には思えなかった。

彼女が祈るように両手を組んだ。彼から視線を逸らして下げる。
「わたしが話しても、話さなくても、貴方も桃花も望みを変えない」
「……」
「わたしも知りたい。貴方はわたしに……どうしてほしいか」
彼の言葉を否定しなかった。彼女はやはり、桃花に関わる「力」であること。だから桃花は、無力でありながら四天王の城に行こうとしている。
「君に何ができるのか、俺は知らない」
「……」
「桃花のことを知っているなら、教えてほしい。それで俺達が、何も変わらなくても」
彼に刻まれた腕の印を見て、桃花は僅かな迷いを持った。彼の暴走が抑えられるものであれば、このままみんなで暮らせないのか。
それは桃花が、彼の消えない道を見出したこと。裏を返せば、彼は消える、桃花はそう断じていたことになる。このままじゃいなくなる、と言った通り。

「……信じてくれるかな。わたしも段々、何となくわかってきたことばかり」
「今までは、わからなかった？」
「うん。だってここは……わたしにとって、『夢』だったから」
「……夢……？」
彼女の表情があまりに悲しげなので、良い意味での「夢」には思えない。それでも知れることは知りたい。
黙る彼に、彼女は呟くように先を続ける。
「誰の夢かは誰も知らない。それでもここは、いなかったはずのヒトがいて、いるはずのヒトがいない夢。貴方は、いるはずなのにいなくなるヒト」
「――……」
「桃花は、いなかったはずのヒト。わたしは……貴方が運命を決めるヒト」

「――え？」
　彼女が苦しげなまま、青い眼を上げた。空色の髪が徐々に薄まっていく。
「わたしの願いが、みんなを傷付ける。たとえ夢でも、そうでなくても。貴方は夢の外では、わたしを止めた……じゃあ、この夢の中では？」
　それはまるで、悪魔のささやきにすら聴こえた。彼女が何を言っているか、ほとんど理解できなかった。
「わたしがいなければ、桃花は消えない。……そう言ったらわたしを消してくれる？」

　彼の心臓を、腕の印からのびた魔手が握り潰したように、全身から血の気がひいた。そうでなければ彼はこの時、赤い獣と化してもおかしくなかった。
　彼らの里と季節は大きく変わらないディアルスは、初冬の寒気に包まれている。それなのに一瞬、体中に灼熱が走った。後は冷や汗が黒衣の内をだらだらと流れ、吐息の乱れを抑えるだけで精一杯だった。
「桃花が消えるって……どういうことだ？」
　そうならないために、彼はここにいるつもりなのに。北の城に行くと言ってきかない桃花を、命に代えても守るために。
「……わたしは、桃花と貴方なら、貴方を選ぶ。貴方とこの先、その眼で掬う命を」
　彼女の深い青の眼が、紅く変わったように視えた。先程から硬直したままの彼に、ぴくりとも緩まない冷たい顔を向ける。
「貴方が消えるつもりなら……わたしは、悪魔の力を借りてでも、貴方を止める」

　そこまで言うと、彼女は唐突に、宵闇の中に消えてしまった。彼はまだ動くことができず、自身の腕に縛り上げられたように、無数の印が体の内で蠢（うごめ）く獣を抑える。
　そんな彼を、見張り達も見ていない中。ただ一人だけ、物理的に彼の死角にいた監視者にも気付かず。
「――ふうん？　　何なんよ、この……命捨てたがる奴らの、限界集落もどき」
　彼にとっては背後の斜め上の鋸壁で、黒い烏（からす）が誰かの腕にとまった。月もない暗夜に飛ぶ生き物は、ただの烏でないことは自明で。
「流帷（るい）の奴、あれ、心を決めたな……それじゃせいぜい、『悪魔』も頑張らなきゃなあ？」
　彼を見ていた烏を腕に、やれやれ、と肩を竦める自称悪魔。この「夢」に関わらざるを得なかった誰かは、大きな溜め息をつくのだった。

　彼が消えるなら、空色の彼女は桃花より彼を選ぶ。不吉さしか感じない言葉を残した相手に、翌朝から彼は空色の水晶兎を凝視するしかなかった。
「なんや、レイアス？　　オマエちゃんと、作戦会議する気あるんか？」
　彼ら一行とディアルス側の助け手、妖精の魔女と金髪の騎士が揃った客間で、彼は北の城の図面より水晶兎ばかり視ている。悪友の不審も当然だった。

一応ちゃんと、話は聞いて考えている。結局桃花が行くと言う以上、どう北に侵入すれば最も無難か、彼だって情報は整理しておきたい。
「とりま、北の城内は全域、北方四天王さんの結界が全種イケイケだからな？　力は封じられて下手に動けば水矢に貫かれて、城外はこれまた北方さんの手配で作られた結界まみれで、聖地あたりまで危険地域だからな、あっこ」
敵側の内偵という金髪の騎士が、悪びれずにさらさら説明する。騎士には妹分の忍がおり、その忍が北方四天王の城で部下として働いているため、詳しい情報を入手できるのだ。今回の協力の対価に、いつか騎士の妹分をディアルスに受け入れてほしい、と言った。騎士自身の立場はどうでもいいと。
「魔女さんがいろ、っていうからまだいるけどさー。おれみたいな鼠、抱えてて大丈夫なの？　ナナハちゃん」
「貴男は自分の心配をすれば？　私達に利用されてると知れれば、身が危ないのは貴男自身でしょう」
動じない魔女は騎士のことを、背中から斬ってきかねない敵、とまるで思っていない節があった。しかも無意識に。
あれ、大丈夫なのか？　とラストが桃花に尋ねていた。桃花はさらりと、ナナハが気付いてないだけで、両想い、と素っ気なく返していた。

とにかく北の城は、四天王に加えて優秀な部下が作った結界まみれで、気付かれずに侵入するのは不可能、そして城内では戦闘もおぼつかない状況。後でわかることには、その結界はラストの双子が作ったものだった。特殊効果のある法具作りに長けるラストのように、高度な魔道を魔力のない者が行使可能な道具を造り出せる、末恐ろしい武器商人の娘。
そんな者達がいる堅固な城に対抗するため、出た案は大胆そのものだった。北方四天王が移動用に使い、日頃は海岸に停泊する魔導船を乗っ取り、城に攻撃をかけよう、とラストが言い出したのだ。
「オレ一人がしばらく改造に乗り込むだけなら、ばれずにいけると思う。準備が整えば海賊でも雇って、砲弾で城を襲わせる。城が動揺してる間にオレ達も何手かに分かれて忍び込んで、撹乱する」

幼い顔でしれっと言うが、様々な軍備は揃っていても、後継ぎを探すほど人手不足という四天王には通じそうに思えた。侵入を気付かれることが防げないなら、戦力を分散させる。
「そこまでやるとさすがにディアルス、責任問題にならね？」
「うちと全く関係ないツテで、どう船の乗り手と、攻撃の口実を作るかが肝心ね。四天王を襲うバカな海賊はさすがにいないでしょうし」
驚くことに、魔女は乗り気で提案を受け入れていた。どうやら乗り手に当てがあるらしいのだ。

「そんなら後は、城の外周全部、おれの舎弟に襲わせたるわ。ただの鳥や思っとったら痛い目見るで」
「タツクは生身で十分戦えるもんな。城に入るのはオレ、タツク、桃花とレイアスの三手でどう？」
　結界による察知を完全に防げるものではないが、ラストが全員に身を隠す外套を用意すると言う。特に桃花は戦わないので、力を内外から防ぐ鎧の機能を最重視した物。城に入ってからラストや桃花の家族を探すのは、桃花を守りつつ彼の眼に頼りたい、とラストが率直に言った。
「オレとミストは同じ力を持ってる。レイアスの眼なら誰がミストかわかるはずだし、桃花の姉ちゃんは桃花自身に見つけてもらわないといけない。暴れるのはオレ達がやるから、二人はそっちに集中しててほしいんだ」
　彼の眼でなくても、ラストと双子はそっくりでわかると思う、とも加えられる。それでもラストが、大事な桃花と双子のことを彼に託すのは、信頼だけでなく悪い予感があるからだった。
「……母さんの遺体も、里では見つからなかった。ミストはずっと、体が弱くて寝たきりだったから、四天王に高度な道具を造ってる奴がいるなら、母さんしか考えられない」

　この後、魔導船を改造しに潜入している時に、ラストは双子と再会を果たす。虚弱だったはずの娘が部下の一人としてぴんぴんと動き回り、魔導船を含め、四天王に様々な兵器を献上していると知る。
　更には双子の娘は、ラストが思い余って姿を見せても双子とわからなかった。ラストそのものを覚えておらず、道具作りの知識以外真っ白な心。双子の母がどうなったのか尋ねても、「そんなヒト、知らないのニ」の一言だったと。
「……間に合うのかな……」
　桃花が水晶兎を抱きながら、重い顔で呟いていた。何もわからない彼は、黙って彼の方針を定めるしかできなかった。最悪の時には桃花を守り、ラストの双子は諦めることを。

＊

　立ち上がるには天井が低く、狭くて暗い何処かの場所で。水晶兎を肩に乗せて、うとうとしていた彼は夢を見ていた。
　ここより暗い城下町で、大切な人が彼の腕を掴んだ。彼は小さな子供を大事に抱えていたから、手が塞がって握り返せなかった。

――先に行って。わたしは大丈夫。

夜空の奥のように、静かな光を湛える黒髪。水晶兎と同じ青の眼色。声は何故か空色の髪の彼女で、「力」は悲しげな大気を纏う。
けれどその時、彼には紅い蜃気楼が視えた。彼の内に長く封じた、赤い獣を解放したからだと思っていた。たとえ赤い獣に彼が焼かれても、腕の子供だけはすぐに連れて行くべき場所があった。
だから気付くことができなかった。大切な人を紅い魔が包もうとしていることを。

――わたしもすぐ、追いかけるから。

自分自身を欺(あざむ)いてまで、大切な人は彼に嘘をついた。大切な人がその後、彼と子供の前に現れることはなかった。
彼も子供を残して、赤い獣と共に滅んだはずだった。なのに「レイアス」は、赤い獣を生まれた時から暴走させた。
世に多くいる魔物というものは、「力」――我執を引きずる滅んだ化け物。魔物でなければ、赤い獣がそのまま「レイアス」になることはないが、彼は「レイアス」の意志で獣を何とか止められ、魔の気配もない霊獣だった。だから今までぎりぎり生かされてきた。
「.....じゃあ、アイツは、何でいるんだ」

本当は何度も、その存在を問いかけてきた。赤い獣の意味がわかり、未練を継げば彼も魔物になるのだろう。どうせ傍迷惑な化け物なのだから、魔物になって何が悪い。
それでもいつも、あの日の紅い蜃気楼と青の眼が彼を押し止めていた。彼にしかできない、魔物では取れない手がそこにあった。
魔物に魔物は救えないから。頑固過ぎる大切な人が、そんなまっすぐな気強さが愛おしくて、魔物になるほど望む願いを叶えてやりたい――

がん、と激しい揺れで頭を打って、狭い密室の中で彼は目を覚ました。
「ごめん、噴流にぶつかったみたい。ちょうどいいから、そろそろ浮上を始めるよ」
北の島に極秘に上陸するため、ラストが潜水艇という移動道具を発明した。妖精の森には、ただ水中に沈んで浮かぶ卵型の玩具がある、と桃花にきいてのことだ。魔女が取り寄せ、それを見てのラストの設計をディアルスの技術者が何とか形にし、北の島の魔導船をいじる傍らで潜水艇も造り上げさせた。
そうして準備が整ってから、彼らはついに北に侵入したのだ。
ここまで大分時間がかかったが、それでもこうして、海中を行ける密閉された船を造るには速過ぎる方だろう。最低限の人数で行くので、とても狭い艇内であるとはいえ。

彼、悪友、ラスト、桃花。そして水晶兎。紅い水晶を額につける空色兎は、桃花のそばにいなければ未だに歩くのもおぼつかないが、桃花が「必要」と言い張り、その理由についてこう説明していた。
「このこの水晶、本当は咲杳のものになるはずだった力だから。このこがいれば、最短距離と時間で咲杳を探せる」

ラストが改造した魔導船から北の城への砲撃開始が、島に上陸すると決めた時だ。その日の魔導船の統括者はディアルス内偵者の騎士の妹分で、無念にも侵入者に敗れて捕虜になり、千族狩りの国へ売られるという筋書きになっている。
「桃花、ホントのホントに大丈夫かよ？　顔真っ青だし、やっぱりここに残るわけに……」
思い切り船酔いしたという桃花の背を、森に隠れてラストがさすっている。それでも行く、と胸元を握りしめる桃花に、彼も改めて溜め息をつく。
「いつもは水筒とリュック入れてる所、今日は通信機と避難箱を詰めといたから。魔除け効果も強めてあるし、いざとなれば避難箱出して引きこもれよ？」
魔除けと道具入れの機能がある桃花のリボンを、ラストが黒い髪に結び直してやっている。ありがと、と珍しく素直な桃花が、神妙な青い顔で俯いていた。心細いのか無意識にラストに寄りかかっていて、ラストが赤面していることに気付いていない。ただの弱い人間である桃花は、過酷な山中の生活の中で、強がりながらラストを煽って一番頼ってきた。あの強(したた)かさ、反則、と、恋する少年はよく言ったものだった。

彼はそこで、不意に、夢の紅い蜃気楼を眼にしていた。
「え？」
ラストの腕を掴む桃花に、何かが重なって見える。桃花がラストの目を見ないまま、あえて表情を消し去る。
「……先に行って。私はレイアスと、後で追いかけるから」
彼の背筋を、冷感が走った。それは予定通りの侵入であるのに、先鋒となるラストを引き止めたくなった。
「ほんま気ぃつけーや、ラっ君！　死ぬなよ！」
悪友は表から大量の鳥を呼びつつ、正門で自身の霊獣で城を威嚇して、可能なら城に押し入る手筈。城内では多分、全力の霊獣を使えないための作戦だ。姿は外套で隠させて、城の外の結界除け機能も外套にある。
そうしてラストが、当たり前だし！　と外套を翻(ひるがえ)して、森の暗闇に消えていった。

悪友も行ってしまい、彼と桃花は、島中に張り巡らされた結界の「力」の弱い所を通って城に向かった。外套の結界除けで何とか隠れられて、最も安全に行けるはずの隙が視えるから、桃花の護衛を彼は任されている。

　桃花は外套姿で水晶兎を抱きしめ、木々の間から半分だけの月を見上げた。
「ほんとにここまで、来ちゃったんだ。私が言うのは酷いけど、みんな、お人好し過ぎない？」
「……今更過ぎないか、桃花、それ」
「本当にそう。知ってて頼ってきた、ごめん」
　淡々と桃花は、無表情に語る。あえて感情を抑えるかのように。
「咲杏もね、強い力を持ってて、私を絶対守るんだって大切にしてくれた。ヒトの全然いない所で育ったから、私が生まれて凄く喜んでくれた」
　彼らは水晶兎の見る方向に行く。空から見ればＬ型の館のような城には入口が五か所あり、水晶兎の視線を追うと、本城でなく別館に咲杏はいるようだった。

「咲杏って、優しくて純粋なの。私と違って」
　今まであまり言わなかった、姉のことを話す桃花。彼は周囲を必死に視ているので、話半分に聴くことしかできず、先の謎の冷感もまだ背中に流れ続けていた。
「今も昔も、みんなが良くしてくれて、私、とても楽しかった。幸せだった。こんな私に、ほんとにありがとうね」
「……不吉なこと、言うなよ」
　彼の右腕がズキン、と痛んだ。どうせ城の中では結界で力がろくに使えないので、赤い獣を封じたままの印が、前腕をあちこち締め付けている。

　何も四天王を倒しに行くわけではない。桃花とラストの家族さえ連れ出せばいい。
　戦う必要はない方がいい。わかっているのに、赤い獣が体の内で叫んでいる。

　時間を置いて何度も続く砲弾の音が、またしても北の島中に響いた。魔導船を乗っ取った賊は、「この古代の船を再現した者は、不秩序だから引き渡せ」と主張しているらしい。
　世界には「原理派」という、「力の秩序」を重視する一派がいる。主に教会を司る者達の集まりで、教会の原理では「力」とは「神」による秩序の流用なのだ。特に魔道は世界の「理」を利用する最たるもので、ラストの法具造りは霊法という、魔力に依らない魔道の対極の儀である最上級の神威と言われている。
　ある物に本来あるはずのない特殊効果を付加することは、「不秩序」と隣り合わせの「力」の介入にあたる。魔力でも物を魔法効果で修飾することは可能だが、術者が魔力を放つ一時だけの付与という違いがある。
　ラストが改造した魔導船は、元々ラストと同じ霊法で造り上げられ、特殊な法術効果を魔力が流されていない間も維持している。細い蛇のような長い船で、「小龍」という名らしいが、周囲の風景に溶け込んで日頃は隠される特殊機能を持ち、魔力を流せば飛空艇にもなるとのことだった。

物質への特殊効果の付加という不秩序は、その物が壊れれば終わりなのでおおむね見逃される。賊は「小龍」製作者の出頭を要求しているが、それでラストの双子が出てくるなら苦労はなく、出てこなくても「小龍」を壊して賊が去れば筋は通る。賊というのも不敬で、「秩序の管理者」と呼ぶ方が適切だろう。

本当に存在したのか。と彼も呆れるくらい、古めかしいのが「原理派」だ。おとぎ話だと思っている者の方が多い。いるとしても介入先は天使や悪魔、精霊など純血の高次存在が主でもある。

「桃花もナナハも、変わった奴らと知り合いなんだな」

桃花の話が途切れたので、暗い道を行きながら彼がぽつんと呟いていた。今「小龍」を乗っ取って、北の四天王に喧嘩を売っているのは、少し前に彼も会った鴉夜（あや）だというからだ。

「引き合わせたのは母さんだよ。まあそれも、わたしのせいなんだけど.....」

ふっと、水晶兎が、桃花と繋いだ手を伝って彼の肩に登った。かすかに紅い水晶が光っている。

「力」を視る彼の眼には、紅は魔物に多い色だ。本当は桃花の姉のものだった力というなら、四天王の城にいることも含めて、咲杳も何者なのだろう。詳細をきいていないのに、こんな危険な島に来た彼らはどうかしている、と改めて思った。

誰にもきっと、居場所がなかった。明らかに弱小な生き物の桃花を守る日々は、むしろ彼らが救われていたのかもしれない。

「今も、最初も.....怖くなかったのか、桃花」

ラスト以外、力だけを見れば、現存する化け物の中ではわりと凶悪な部類に入る彼ら。ラストはラストで、神聖な意味で一味違う。

四天王など悪魔である上に監獄の支配者で、小魔物相手でも殺されないよう汗だくで逃げ回っていた桃花は、生来の不思議な目敏さも含めて、自身の無力さ、何が危険かをよく知っているのに。

「.....怖いよ。.....ずっと」

彼の手を握る手に力が入った。水晶兎が桃花を見つめる。

「怖いし.....認めたくない」

「.....？」

「だから、そのコを造ってもらった。でも、そのコも.....」

桃花が水晶兎を見つめ返す。人間の無為な黒い目と、兎らしからぬ青い眼を揺らして。

「ラストの双子.....ミスティのことがなければ。私、咲杳のことは、母さんに任せちゃったと思う」

「――え？」

ミスティ。ラストはミストと言っていた相手の真名のようだが、どうして桃花が知っているのだろう。

「レイアスだって、皆がいれば何とかなる。それなら私は.....でも、ミスティは.....」

やがて、城の別館の裏手が目前にまで来た。ここからは結界の感度の桁が変わるため、話をする余裕はなくなるだろう。
「ミスティは、助けようとしてくれてる。私だけ、逃げるわけにいかない」
「桃花……？」
「一人ぼっちだから、ミスティにはラストが必要。レイアスも、お願い――そのコのこと、どうかよろしくね」
ここから彼が獣の羽を出して、桃花を連れて屋上に上がる。そして水晶兎の導きに従って咲杏の下へいき、ミストも近くにいれば助ける。内偵の騎士の妹分からの情報で、ミストは咲杏付きの者というので、一緒にいる可能性は高いと踏んだ。
だから桃花の言葉は、水晶兎をきちんと守れ、の意のはず。咲杏とミストを探すために、桃花の前に現れた「力」。

……彼はいつも、どうして彼女の言葉には、眼を塞いでしまうのだろう。
屋上までは飛べた。内部に入った瞬間、力が大幅に抑えられて羽が消えた。どうせ封じられている赤い獣なので、元より想定の内だ。
ここ数カ月、この城では結界担当者が倒れたため、これまでの堅固さよりはまだ隙が多くなったという。ちょうど水晶兎が現れた頃からで、その結界担当者はミストの補佐役であったために、支えを失ったミストの挙動が不安定になっているとも。
「行こう、桃花――大切な人達を、助けに」
ラストに造ってもらった剣を抜いた。彼の「力」が視える眼を活かせる、「力」を斬れる効果を持った長剣で、探知覚悟で屋上の扉の結界を斬った。
桃花と一緒に中に入ると、出迎えの水矢が沢山飛んできたが、ラスト作の外套で何とか弾ける強度だった。

大切な人達。彼の言葉に、桃花がきょとん、とした直後だった。
「……ありがとう、レイアス」
外套の頭巾に隠れて、桃花が笑った。里を出てから、めっきり消えていた淡い顔で。
里に居た頃にも、桃花は滅多に笑うことがなかった。いつも何かを抑えるように、特にラストには冷たくあたっていた。
その意味を彼は考えないようにしてきた。たった今まで話されてきた、桃花の絞り出すような言葉も。
後悔することになる、と本当は知っていた。それでも、彼は――

急

　北の城の結界や軍備が堅固。その情報を聴いた後に、ラストが作戦会議で言ったことがあった。
「ミストが北にいるなら、結界関係は多分母さんの仕事だ。ミストを人質に取られてるのか、何か違う理由で協力してるのかはわからないけど」
　法具造りに特化していて、精霊の子を宿すとされる一族。長である巫女の子供がラスト達で、本来女児しか生まれない一族であるのに、男に生まれたラストのために巫女は敵を多く作ることになった。
　後継ぎとなるはずのミストに、精霊の力が受け継がれなかった。物造りの知識だけを、虚弱な娘は学んだという。ラストの蒼い目より純粋な精霊の紫を持ち、余力さえあればラストより高度な道具が造れた。だから一族の者は常に、ラストを排して精霊をミストに還せ、と主張していた。男と言う存在そのものを、一族は怖がっていた。
　それでも母は、ラストを捨てなかった。思えば悪魔がラストの里を滅ぼした時、排除されたのは母の敵だけなのかもしれない。
「母さん、空間や門に関する道具作りが得意な人だったから。結界は勿論、やばい作用の武器も補助具も作れると思う。ミストは体が弱いはずなんだけど、ミストまで道具造りをしてるとしたら、それが母さんの弱味かもしれない.....」

　結界担当者が倒れた。そしてミストが不安定になった。おそらく倒れた者が母だ、とラストは城に行く前から彼らに伝えていた。
「オレが潜入した頃にはもう倒れてたから、母さんのことは確認できなかった。でもミスト.....まあとにかく、結果が緩んだ今が好機なんだ。きっと母さん、ミストを助けてくれって、自分で結界を壊す方向に出たんだ」
　ラストの言う通り、彼らが城に入っても結界は強化されず、人手が少ないために結界頼りという城での応戦者は少なかった。いつも城の警備をしているという騎士の妹分や他の忍も、騎士の妹分が魔導船で拉致されたため、そちらに救出に出ているのだ。
「気持ち悪いくらい、でき過ぎてるな.....今、城に入ってくれ、と言わんばかりだ」
　彼と桃花（とうか）は屋上から入り、研究棟らしき別館の階段を下っていた。水晶兎の先導についていっているのだが、本城と連絡通路がある踊り場に出た所で、水晶兎がふっと止まった。

宙を見上げ、水晶兎の眼色が澱んだ。桃花が顔を強張らせた。
「.....わかった。ありがとう、ファウント様」
「え――」
「レイアス。みんなを助けて」
ここで桃花が、まさかの行動に出た。ラストのくれた物入れリボンから煙玉を取り出し、床に叩きつけて激しい煙幕を起こした。
「桃花――！？」
ラスト作のリボンは、五つの物を入れておける。大きな物、小さな物、中ぐらいの物、長い物、短い物。その内、小さな物にはこの煙玉、長い物には伸縮効果のある鈎縄、短い物には折り畳みナイフを常備していた。桃花が山で迷った時や、魔物に出会った時に使うためだ。
山で桃花の居場所の目印にしたり、魔物から逃げさせたりするために、気配を消す効果もある煙が大量に噴出される。直下にいた彼は視界を完全に塞がれ、元々気配を探るのは苦手な方なので、人間の弱い気配の桃花を見失ってしまった。
「待て、桃花、何処に行ったんだ！　君、桃花はどっちだ！」
水晶兎も場に残されていた。桃花が離れたので、動きがよち、よち、となってしまっている。
こんな悪魔しかいない城で、単独行動など自殺行為だ。彼は咲香（さくら）やミストのことは脇において、桃花をまず探す、と即断する。
「連れて行ってくれ！　目線で誘導してくれ、君が動けるようになれば桃花はいる」

水晶兎を肩に乗せた。青い眼が直接視えなくなったので、彼は水晶兎の悲しげな眼色にも気付けなかった。水晶兎がにわかに紫の色を纏い始め、違和感に気付く前に答は目の前に出てしまった。
水晶兎は、彼を導いた。彼の望み通りに、桃花のいる先ではなく、ラストがミストと対峙する本城の広間へ。
「な、レイアス――！？」
余裕の欠片もないラストが、震えながら無骨で大きな銃を構えるミストの前にいた。ミストの周囲には太った鳥のような機器も大量に飛び交っており、怯えるミストのためにラストに突進攻撃をかける。
「また侵入者.....帰って！！　私、アナタ達なんか知らない――！！」

背後には番兵も引き連れているミスト。そこで、水晶兎の眼色が完全に変わった。
青から紫の目になった水晶兎が、ミストに飛びついた。今までは桃花から離れてろくに動けなかったはずが、俊敏な動きで彼から離れて。
「！？　桃花が来たのか！？」
しかし周囲に桃花の姿はない。驚いて銃を落としたミストの腕の中で、水晶兎が物言えぬ顔で必死にミストを見つめた。

「なん、で……どうして、私と、同じ目……？」
　ミストと水晶兎の目は、どちらも稀有な深い紫苑。妖精の系統は宝石のような透き通る紫の目を持つが、いずれも神秘な精霊に深く関わる種族だからだ。
　ラストが、母さん、と呟きかけた。そしてはっ、とミストに目を戻した。
　彼も本能的に悟った。彼こそ誰より、「力」の縁を視る者なのだから。

　桃花のそばでは動ける水晶兎。青い眼の時には桃花の「力」らしき彼女。
　ミストのそばで動く水晶兎。今この時は紫の目をして、ミストと同じ「力」の色の。
「まさか……ミティ、その体……――」
　虚弱でろくに動けなかったはずの娘。それがこうして、城の兵士としてまで活動できている姿の理由は。
「――言うな、ラスト！」
　咄嗟に叫んだ。彼と同じことを悟ったのは、ラストが曲がりなりにも娘達の血縁であり、また物造りに特化した一族だからだ。
　今、水晶兎を動かしているのは、同じ紫の目を持つ双子の母だ。おそらくは母の魂というもの。魂の気色は目に表れるのだ。
　ミストのそばでは動けているのは、ミストの体に母の本体――命が宿るからに他ならない。桃花のそばでは動ける「力」、青い眼の水晶兎のように。

「あ……私……――」
　娘は何を、何処まで気付いたのだろう。双子のラストのこともわからなかった娘。
　きっと、母を失ってしまった時、娘は自らの魂を壊した。水晶兎を見て、生気の消えていく娘の目に彼は焦る。
「それは君のせいじゃない！　君の母さんは、君がラストと逃げることを望んでいる！」
「レイアス……！」
　ラストもあまりに想定外で、血の気が引いてしまっている。だから彼が必死に娘に叫びかけた。
「ミスティ、辛いことは思い出さなくていい！　ただラストを信じろ！！」
　虚弱だった娘は、母が造った法具の人形に魂を遷され、全ての記憶を失うことを代償に今の娘となった。彼らの前にいるミストは、限りなくヒトに近い人形に宿る娘だった。
　その人形は、母を材料に造られたのだ。だからミストの魂が宿れて、我が物のように体を使える。けれど実の母の体に宿っているなど、幼い娘には残酷過ぎる真実だろう。ラストも衝撃を受けてしまい、何も言えずにいる。

　銃を落として抱えた水晶兎を、ミストが手放した。紫苑の両目が大きく歪み、呆然としたまま涙に溢れていた。
「……いや……来ないで……！」

くるり、と振り返って、ミストが走り出した。兵士達の間をぬうように駆け出したところで、奥から出てきた者にぶつかり、気を失うことになった。
「.....私の大事な娘達に、こんなに手荒に近付く者は誰ですか」
彼もラストも愕然とする。現れたのは城の主で、北方四天王そのものだった。他の者より桁違いで力が大きいので、すぐに判った。
人手不足というのは本当なのだろう。それ以上に、意識を奪ったミストを丁重に抱えて、「大事な娘達」というのも本心なのかもしれない。

ともあれ、四天王にとって、彼らは間違うことなき侵入者だ。彼らへの視線には冷酷さと怒りが滲んでいるが、それでも話をする気があるようだった。
「ラスティル君はわかりますよ。ファウントから話は聴いていました。いつかミスティルに会いに来るとは思ってましたが.....もうひと方は？」
ラストも彼も押し黙る。彼らの軌跡を見ればディアルスの関与が知れるかもしれず、迂闊なことを口にできない。
「.....まあいいでしょう。結界はともかく、君達は我が城の兵士を傷付けていません。もしも君達が、ミスト目当てで現れたのなら、取引をしましょう。私の傘下に入り、君達自らがここで、ミストを守りなさい」
「――へ？」
ラストが拍子抜けしたような顔をする。大物の悪魔を相手に、信じられそうにない提案なのだが、四天王は真面目くさった顔付きで言う。
「私はおかしなことを言っていますか？　　これでも最大、譲歩しているつもりですが」
それは四天王の言う通りだろう。侵入者を見逃した上に、部下として取り立てるというのだから、悪魔にしては手厚すぎる。
ラストはずっと、口ごもっている。それが全員、この場で無事に済む可能性をもたらすのなら、無下に跳ねつけるより言うことをきいた方が良いのかもしれない。四天王自らが出て来た以上、厳しい流血の末路は避けられない。
主君として四天王が気に喰わなければ、機を見て逃げ出すことができれば。その道を探す時間が得られる。彼も途中で離れた桃花が心配であり、四天王が無事を約束してくれるなら、仕方なく軍門に下るのが無難ではないのか。彼の里の者達が西の四天王についたように。

だから彼は、桃花のことを口にしようとした。人間の弱い気配といえど、侵入は悟られているはずの最後の一人。
「俺達を生かすと、保証してくれるのか。俺とラストと、あと――」
正面玄関付近で戦うはずの悪友。何処にいるのかもしれない桃花。彼がそう続けようとした時のことだった。
「.....みんなをこのまま、解放しなさい。でないと、アナタは.....」

ずる、と足を引きずるように、広間に少女は現れてしまった。
彼とラストが蒼白に振り返り、四天王もよく整った顔を歪めた。扉のない広間の入り口には、黒い珠玉を持ちながら胸を抑える、息も絶え絶えの桃花が立ち尽くしていた。
「桃花……！？」
水晶兎が青い眼に戻り、桃花の方に駆けていった。彼とラストは四天王と牽制し合っているため、四天王も彼らもすぐに桃花の所に行けない。

天井が高く、一部は吹き抜けで、天窓から月が見えている薄暗い広間で。呼吸の荒い桃花は片手で外套の上から胸を掴み、残った手で見知らぬ黒い珠玉を掲げた。
「これ、アナタには、触られると困るものでしょう。大人しく返してほしければ、ラストもミスティも、レイアスも咲杏も解放して」
「その珠玉を、アークの鎧から外せるとは……貴女は適合者ですか？」
訝(いぶか)るような顔で、ミストを抱える四天王が桃花を見る。何故ならその珠玉は、彼の眼から見てもあまりに大きな「力」で、しかもその「力」は起動しかけた状態だった。とてもでないが、人間の桃花が持てるものではない。
「咲杏(ヴァシュカ)は制御に失敗しましたか……いや、君が邪魔をしている？」
「……」
桃花は自分の胸を離すと、片手だけで紅(あか)いリボンをほどいた。リボンが一瞬光った後に、場にはどさ、っと一人の少女が倒れ込んだ。
長い桜色の髪で、強い水の「力」を纏う少女だ。透明な青の気に包まれている。桃花のリボンに「大きな物」として入れられてきたようで、代わりにラストが桃花のために造った、緊急避難箱は何処かに置き去られていた。
「……咲杏(さくら)にこれを、使わせないで。でないと、貴方の望むアークも消える」

水晶兎の紅い水晶が、ずっと光を持っていることに彼はやっと気付いた。その光が黒い珠玉に繋がり、暴発を押し止めている。
しかし、黒い珠玉に完全に共調しようとはしない。間もなく珠玉の力は弾ける、と彼にはわかった。
「誰もこれに、触れないでいて……夢への代償は……私が受けるしかない」
そこまで言うと、桃花が何を言わんとしているか、四天王にはおおむね伝わったようだった。彼にはわけがわからないが、桃花の物言いを遮らないのはそういうことだろう。
「君は、適合者として一度介入しながら、『桃花水(とうかすい)』を拒絶すると？」
そんなことをすれば、と四天王が言いかけたところで。
桃花がごぼ、っと血を吐き出した。最早それは、手遅れだと言わんばかりに。
「――……！？」

　桃花の胸から、夜のように透明な黒の水が噴き出した。同時に血が迸り、桃花が珠玉も落として崩れ落ちた。
「桃花.....！！」
　回復魔法を使えるラストが駆け寄る。しかし誰が見ても、それは即死だった。
　心臓が内から破裂するように、大輪の血花が咲いた。回復魔法は施される相手が生きていなければならず、抱き起こした桃花に叫ぶラストに彼も頭が真っ白になった。
「桃.....花.....」
　ラストの体中を真っ赤に染めて、事切れた桃花が揺さぶられる。何で、と叫ぶラストの横で、倒れていた咲杏がぴくりと手を動かした。今まで咲杏こそ呼吸を止めていたのに、水晶兎がつんつん、と咲杏を起こすようにつつく。
「愚かな.....『桃花水』に触れれば、そうなることはわかっていたはず」
　彼の右腕に灼熱が走った。まずい、と思う暇もなかった。
　刻印が全て、右の前腕ごと燃え落ちてしまった。抑えられない慟哭が彼の意識を殺し、赤い獣に自我を委ねてしまうまでに。

　やめろ、レイアス、とラストが叫んだ。四天王もミストを抱えながら退いた。
　誰かに怒りをぶつけても仕方がない。それでもきっかけは四天王のせいだ。
　赤い獣が暴れ出した。おそらく目障りなこの城を焼き尽くすために。

＊

――レイアスも、そのコのこと、どうかよろしくね。

　一応触れる水晶兎とは違い、彼らの獣、霊獣は普段霊体でいる。霊獣の本体は「力」の闇に坐し、本来の力を顕す時には現身の彼と入れ替わる。
　だから彼は、真っ白な頭のままで、赤い獣の代わりに気が付けば闇にいた。本当なら本性を出しても意識は彼のままでいるのが霊獣の制御なのだが、彼は彼を手放してしまい、闇に閉じ込められてしまった。
「俺は.....アイツは、何を.....――」
　もうひたすら黒い闇しか視えず、四天王の城で何が起こっているかさっぱりわからなかった。赤い獣があの場で暴れて、何も解決するはずがないのに、彼は自身を抑えることができない。
「戻らなきゃ.....でも.....」
　戻っても、もう桃花を守ることができない。それだけで全身が焼けるように痛み、意識が裏腹に胡乱（うろん）になって、どうしても心が定まってくれない。
「桃花、何でだ――何で――.....」

　彼と離れ、桃花はあの危険な黒い珠玉を取りにいったのだ。そんなことをしなくても、四天王とは交渉が可能に見えた。彼らが軍門に下りさえすれば、良かっただけのことであるのに……。

　彼はいつも、どうして眼を塞いでしまうのだろう。彼女の言葉は嘘だらけで、後悔することになると本当は知っていたのに。
「……ごめんなさい。でも、これしか、桃花がアークに繋がる術がなかった」
　闇の中に、空色の彼女が突如顕れてきた。何故か水晶兎を抱いて、水晶兎はくたり、と目を閉じてしまっている。
「四天王は、ミストを手放さない。貴方達は必ず敵対する。それならここで、貴方だけでも……どうしても、いなくならないでほしかったの」
　黒い場が玄(くろ)く揺れた。彼女ははっきり、彼をまっすぐに見つめた。

　この黒い闇に来れる。それはやはり、彼女が「力」であるということ。
「……桃花、なんだろ？」
「……」
「君は、桃花。でも、桃花じゃなくなる……魔物の、君」
　彼女の空色の髪が、徐々に紅に染まってきていた。水晶兎と同じ青の眼も、段々紅い光がさしてきている。
　彼女は悲しげに、動かなくなった水晶兎を、彼にそっと渡すように差し出していた。
「……間に合わなかった。当たり前、だったんだけど……わたしと桃花は、最初からわたしだったから……」
「……？」
「わたしは桃花に、生きていてほしかったの。だからこのコを、造ってもらったのに……このコは、桃花になることができない」
　桃花が死んだ直後には、まだ動いていた水晶兎。今では命の欠片も見当たらず、ただ大きな「力」の空色だけが視えた。
　今なら彼には、何となくわかった。水晶兎は死にゆく桃花のさだめのために、桃花を留めるために生まれたのだと。
「わたしも桃花も、魔竜にしか適合できない……だから、母さんは……」
　死んだものは蘇らない。我執の尽きない魂を持ち、器があれば目覚める魔物であっても、完全に適合できなければ上手く動かすことができない。
　水晶兎は、生きた桃花がそばにあってこそ動けた。本体が消えて、たとえもしも今、桃花が水晶兎に宿っていても、動かせない現実がそこにあった。

「桃花は何で……死ぬさだめだったんだ……」
　最早、水晶にも色が無くなってしまった兎を受け取る。彼にはそれしか訊けなかった。

彼女も桃花も、死後の対策を考えはしても、死自体は回避しなかったのだ。
彼女は俯く。話しても話さなくても変わらない、と言ったかつてのように。
「わたしも桃花も、探しているの。大切なアークを……桃花の器で再現するために」
「大切な……アーク？」
「貴方は何も知らなかった。思い出しても出さなくても、貴方は生きてさえいれば、これからアークを助けてくれる」
顔を上げた彼女が、闇の中でひときわ薄まっていた。はっとする彼に、彼女は苦しげに笑いながら声を続ける。
「母さんが貴方を助ける。わたしの望みを叶えるために」
それなら彼女は。桃花はどうなるのか、と問うまでもなく答が返る。
「わたしは貴方が道を選ぶ。結局この器……魔竜しか動かせないわたしを、貴方――レイアスはどうしたい？」
「俺が、君に……桃花に、何ができるって言うんだ……？」
彼女は結局、桃花の何なのだろう。それも彼にはわからないのに。

死とは、意識の連続の断絶。彼女が桃花と繋がり、死による記憶の遮断を防げるのなら、そうしてなりふり構わず己を保つのが「魔」。
だから桃花を助けるのなら、彼女を保つしか方法はない。「魔」は器に仮に潜む執念に過ぎず、彼女は桃花そのものではないとしても。
「……待ってくれ。今の君は、その姿は『魔竜』なのか」
「うん。正確には、魔竜を降ろしたわたしを宿す、魔竜になった母さん」
彼女の髪がまた一際紅くなった。額には青黒い謎の紋様が浮かび始める。
ラスト達の母と、事情は近いのだろう。ラストの母も彼女の母も、自らの体を娘に与えることを選んだのだ。
「わたし、嫌って言ったの。母さんを犠牲にしたくないって」
「――」
「でも母さんは、わたしがいないと、レイアスが消えるって。レイアスがいなければ、咲杏がわたしの願いを叶えるけど……わたしも何度も、夢に視たけど……」
自分はもう、充分幸せをもらった、と母は彼女に告げた。娘の幸せ無くして自分の未来などない……魔竜とはそういう呪いなのだと。

母も彼女も、呪われた夢を視てしまう魔竜。理屈でないところで彼に真実が伝わる。そのため彼女も、心を決め切れずにここまで来てしまった。
何か他に、違う道はなかったのか。あがいた結果の一つが水晶兎。それでも実の母以上に強い縁にはなれず、彼女は水晶兎でなく、母に宿って今ここにいる。
「わたしの願いが、みんなを傷付ける。それでもわたしは……貴方に、いなくなってほしくない」
「……――」

「わたしは、人間の桃花と契約を交わした悪魔。そう在ることで、桃花と同時に存在ができる」
　それは、と言い澱む彼女を視て彼もわかった。魔竜でなく悪魔として、今後の彼女は生きようとしている。
「桃花の魂は此処にあるけど.....わたしは、わたし。貴方とも、みんなとも何の関係もない、わたしの願いで生きる悪魔」
　たとえ彼女が母の体を貰い、彼女として生を受けたとしても。桃花が戻ることはない、彼女が言いたいのはそれだ。
「.....貴方が選んで。それでもわたしを、助けてくれるのかを」
　彼女の姿が闇に消えた。最後に完全に、紅い髪と目の魔物になって。

　何ひとつ揺らぐことのない、黒い闇が戻ってきた。彼は結局、おそらく事の半分も理解できていない。
「.....」
　動かない水晶兎と共に、ここにいればもう苦しくない。彼がいなくても誰も、困ることだってない。彼女の願いも、いつか叶えられると言うのだから。

――アナタは知らないから、そんなことが言える。

　ぴく、っと彼の指が震えた。またしても眼を塞ぐところだった。
　彼女は嘘つきだ。それを彼は、嫌と言うほど知っているのに。

　彼女が願うから、彼はいつも視て見ぬふりをした。彼女の願いを叶えたかったから。
　それならこれから、彼女の願いを叶える者も、彼でなければ嘘になるだろう。
「.....ごめん、桃花。一人ぼっちにする」
　水晶兎を闇に置いた。連れては帰れない、と何となくわかっていた。
「桃花のそばにいるのは、俺じゃなかった。.....守ってやれなくて、ごめん」
　それが桃花の答だった。いつかきっと、桃花の願いも叶うと信じるしかない。

　そうして彼は、現実では燃え落ちたはずの右腕を掲げた。
　水晶兎の額の水晶を借りた。闇に在る「心」でしかない今の彼なら、赤い獣が宿る右腕を、この無色だけで斬り落としてしまえる――

眩(まばゆ)い光が視界に満ちた。気付けば彼は、ぼろぼろになった四天王の城の広間で、素手の四天王と銀色の錫杖を持つ彼女とちょうど三つ巴になっていた。
「あら。一緒に封印されちゃうかと思ったけど.....戻って来たのね、貴方」
彼の隣に、桃花が咲杏を運ぶために何処ぞに置いていった避難箱があった。赤い獣をそれに封じたらしき彼女――正確には彼女の母が、彼女はしない妖艶な顔でくすり、と笑った。
紅い髪と目の彼女。錫杖の先には透明な空色の珠玉が填まっており、その珠玉が空色兎だったものだ、と彼にはわかる。桃花が持ってきた「桃花水」と同質の、とても強い「力」を持つ何かだ。
「もう一つ取引をしましょうか、四天王殿。彼を追い払ってほしければ、ミストちゃんを諦めなさい」
「.....貴女は、ことごとくがめつい魔物ですね。貴女の娘を大切に育てた私に、少しは感謝がないんですか」
悪態をつきつつ、四天王は赤い獣に相当手酷くやられたらしい。周りにはラストも咲杏も、悪友の気配すらもなく、彼女が何処かへ転位させた後のようだった。
「まあいいじゃない、痛み分け、と思ってくれたら。桃花が死んだのは、貴男が『桃花水』を掘り出してしまったから――それにも感謝はしてるけど、でも桃花は、ミストちゃんの解放も望んでいたから」

そこで彼も、彼女に無理やり転位させられてしまった。北方四天王の城への侵入者達が、その後に糾弾される事態は起こらず、おそらく彼女がそもそも手を回していたのだろう。
転位させられた彼らを引き受けた、魔導船の乗り手が苦しく笑った。
「ごめんなぁ。うちの叔母が、無茶んこ言って」
橘炯(たちばなけい)。前代の魔王の息子で、タツクにも北方四天王の情報を与えたという、胡散臭い鬱金色の髪の悪魔が、秩序の管理者たる鴉夜と共に彼らを引き受けたのだった。

終幕

壊れた人形の体は四天王に譲り、ミストという娘の魂だけ、ラストが北の城から引き受けてきた。どの道人形はもう目を覚まさなかったので、四天王も諦めてラストと取引したということだった。

「オマエ.....まさか直接、自分の体に引き受けるなんて。そんなことすれば今後、オマエの命が削られるぞ？」

「しゃーないじゃん、わかってたけどさ。ミティの魂を遷せるもの、他に何もなかったんだから」

あれから二カ月がたった今だった。心臓だけが綺麗に潰れた桃花（とうか）の遺体は、悪魔である実父が引き取って細胞を培養し、体の損傷は治ったらしい。

しかし実父が、その後にしばし行方不明になったことと、魔物になりきっていない桃花に目覚める意思がないため、人間として桃花が蘇ることはないと通告された。

ラストは魔物でいいから帰ってこいよ、バカ、と毒づいていたが、ラスト以上に桃花の死に泣きじゃくる咲杳（さくら）のために、ディアルスで静養する日々が続いていた。両親から何も事情を聞かされていない咲杳は、突然妹の桃花を失って途方に暮れており、当面の面倒をみる役目を年下でもラストが引き受けた次第だった。

桃花は魔物にならなかった。悪魔と契約し、アークという何か遠い未練を引きずっている、限りなく魔物に近い存在であっても。

「.....それは、良かったのか、悪かったのか？」

彼は、空色の髪の彼女を看病する日々になった。くまだらけの目をした桃花の実父から、直接預けられたのだ。もう紅（あか）い髪には戻らないからお前が守れ、と殺意のこもる声色と共に。

「そりゃ、まあ.....娘が宿ってるとはいえ、自分の女ってことだもんな、本来」

ディアルス王城の一室で、眠り続ける彼女の頬を撫でる。ラストが造ってくれた義手は、彼の「力」も以前通りに使える優れものだ。

北の城から魔導船に彼が引き受けられてから、彼女も赤い獣の避難箱を抱えて船に戻ってきた。髪は紅く、「魔竜」であるままの彼女だった。そして彼女は言った――彼の赤い獣を彼女にくれれば、彼女は「流雌（るい）」という悪魔の自分を保てるようになると。

「正確には、獣はいいから、赤だけをくれ、か.....それで今後の暴走も無くなるし、あのヒトは火の池（ゲヘナ）での力を持てる.....魔の紅でも光で、赤でも闇なら中和できるなんて話、初めて聞いた」

赤と紅は、確かに本来聖と魔の色だ。けれど彼は、聖なる者などではない。
彼女もまた、紅を映しながら本当の魔ではなかった。魔は目前で眠る空色の髪の彼女が、これから映してしまう運命なのだと。

魔竜って、何だ。船で手当てを受けながら炯(けい)と鴉夜(あや)にきいた彼に、二人は困ったように答えた。
「まあ、叔母さんも流帷も、正確には巫女なんよ。あいつらだけが魔竜を世に降臨させてしまえて、魔竜になる手前なのは桃花、ってとこかな」
「だからって、橘瓜(たちばななぎ)が桃花に体を渡すなんて、許し難い不秩序だわ……代償にゲヘナに下るなら何も言えないけど、でも、灰(かい)はどうなるのよ」
あー……と、紅い髪の彼女の伴侶の、養父にあたる相手を心配する鴉夜を、炯がぽんぽん、と苦笑いしながら撫でていた。
「多分、オレ達のためでもあるんだよなぁ。アッシュには悪ぃけど、桃花を失くしたことでどっちも相当きてるし、今は何処も、そっとしとくしかないぜ」
炯の言う意味は、彼にはよくわからない。それでも炯も、油断できない悪魔なのだと何となく通じた。
何故なら炯が、空色の彼女を目覚めさせる方法を教えてくれたからだ。「夢を視続けるってのも、悪くない生き方だと思うぜ？」と言って。

義手が完成したので、ようやく彼女をこれで起こせる。赤い獣を彼女の内に封じただけでは、彼女の紅い髪が消えるまでしかいかなかった。
彼が闇から持ち帰った、水晶兎の水晶を取り出す。今では無色の水晶は、ラストの手製の首飾りに填められ、彼はそっと、眠る彼女に首飾りをかけた。
「……助けるとか、そんなんじゃないんだ」
身に着けるだけでは、この水晶は彼女のものにはならない。元は咲杏のものになるはずだったというのだから、彼女の色の水晶にしなければならない。
「どうでもいい話をしよう。どうせ俺も、眠れないから」

義手を通して、「力」を色で視る彼の特技を発する。彼の右腕は彼に視えている「力」を、混ぜたり消したり、移動させたりすることができる。
大きな「力」を、全て動かしたり、変えてしまうことは難しい。赤い獣だった無色の飛竜を、まず彼女から彼に戻すのが精一杯だ。
彼女の実家では、彼女は目を覚ますことができて、咲杏と話したという。それではこの体のどこかに、彼女はまだいるはずなのだ。
「謝るのはやめてくれ。これは、俺の願いだから」

悪魔なんて嫌いだな、と彼はふと思った。彼の義手の下で、青い光を湛え始めた水晶を視つめた。
桃花と同時に存在するために、彼女は悪魔になった、と言った。桃花に生きていてほしかったから、と。
「.....桃花のそばにいるのか？　流帷」
その真の名を大事に呼んだ。彼が新たな、契約者になることはできなくても。

そこでやっと、足りない最後の欠片がわかった。寝台の横に立てかけてある、彼女の錫杖を手に取った。
水晶兎。この錫杖に填まる空色の珠で、あの兎は創られていた。
「ラストの母さんも、このこを動かしたってことは.....ラストの母さんが造ったこだったのかな」
空色の珠玉の内に、彼にはうっすらと視える、小さな空色兎を義手に乗せた。もう額に水晶はなく、心細そうな兎似の小動物なだけだった。
手の上の空色兎を、彼女の首飾りの水晶に遷す。同時に、彼女がぴく、と体を動かした。静かに待っていると、やがてゆっくり、青い眼を開けていった。

「.....」
黙って彼女を見ている彼に、彼女はよろ、と上半身を起こす。
改めて彼を見ると、泣き出しそうな顔で笑った。桃花は多分しないような、気強さを脱ぎ捨てた悲しい素顔で。
「.....やっぱり、こうなっちゃった」
彼は黙って、彼女の空色の頭を自分の胸に抱き寄せた。
もしも水晶兎と出会わなければ、今この瞬間はなかった。そんなことが今更わかった。
「悪魔でいいから.....ここにいてくれ」

桃花は何か、強い願いを持って生きてきていた。それはおそらく、空色の彼女も同じことを願い、違ったのは彼らとの関わり方だけ。
水晶兎は最初、彼にしか関わらなかった。まるで自分は、ここにはいていけないものと言うかのように。彼もいつか消える身だと思っていたから、本当は何かを傍に置いてはいけないのに、油断して一緒に暮らし始めてしまった。
桃花も心の深いところでは迷っていた。きっと、魔竜の願いに突き動かされて生きた少女は、少女自身の望みを彼らの里で見つけた。ラストと共に生きさせてやることができれば、どれだけ良かっただろう。

――私だけ、逃げるわけにいかない。

空色の彼女は、彼に選択を委ねる、と嘘をついた。彼女の母の意志はとっくに決まっていて、彼がいなくても彼女は何かで、いずれこの体で目覚めただろう。赤い獣一つにしても、彼女の母は自ら手にしていたのだから。
けれど彼女は多分、母を責めたくなかったのだ。彼女が踏み切れないでいた、幾人をも傷付けて生きる魔性の活路。道を開いた彼女の母の、本当の心はどうだったのだろう。

「痛み分けって……言ってたしな」
「……？」
彼の腕の中で、彼女が不思議そうに少しだけ顔を上げた。彼女もそっと、小さな手で彼の胸に縋る。
押し付けなければ、彼女は母の犠牲を望まなかった。その咎を彼が引き受けること。
それが彼女の最大の甘えだった。本当は水晶兎のように、歩みが心細い彼女達の。

＊　＊　＊

かつての同族は悪友以外、魔の下で塵となって。遠く拙い、昔の誓いを彼は思い出した。
天にある島で息をひそめて、造られた森に隠れる彼は、彼を探す赤い天使の全貌を改めて視つめた。
「桃花水（とうかすい）」の珠玉から力を受ける、赤い鎧を来た殺戮の人形。「桃花水」の後押しで人形を動かす、古代の少女「アーク」が彼らの探し人だ。
「くそ、桃花……一瞬くらい、あの子を止めてあげられないのか、お前」
悪魔を仲間に、悪魔に魅入られたアークには彼の声は届かなかった。本当は流帷が来る方が良かったのだろうが、彼女は悪魔として存在するため、魔界で悪魔の城を管理しなければいけない。それが「不秩序」として処分されないために、彼女が払う代償だ。

魔竜とは、何が何でも家族を助けんとした者達の悪夢だった。この十八年で彼はそれを、流帷から少しずつ明かされてきた。「桃花水」は深く関わるものの、それ自体が魔竜ではない。アークに殺戮をさせているのは、淋しいアークを利用する悪魔達だ。
「ディアルス王子まで攫って、淋しい子供を作る悪魔共。思い通りにさせてたまるか」
魔女付きの騎士の妹分が、迎え入れられたディアルスで悪魔が王子を攫う手引きをしてしまった。子供の頃から悪魔に育てられた妹分は、知らず裏切りの心まで含めて悪魔に洗脳された者だったのだ。騎士は追放されて陰から魔女を守る身になり、正気に戻った妹分は隠れ里に幽閉される結果になった。

「……絶対に帰るぞ。ラストが今も、ギリギリまでお前を待ってるんだ」
　アークを動かす古の宝、混沌の黒を纏う「桃花水」。殺戮人形の鎧に填まっていたはずの珠玉は外されているが、ディアルスの王子が肌身離さず持っているのを確認している。
　森から去らせないよう、姿を現し赤い天使に告げる。
「一緒に来るんだ。お前達のことは、絶対に……何をしてでも、俺が助けるから」
　彼と天使の関係を知らなくても、彼は見捨てないと流帷は言った。だから教えないと。
　桃花が求めていた太古の少女。そうでなくても、彼が少し前に見つけた謎の少年と、深い宿業を有する者。その少年を求める赤い天使が、彼らに悪魔を差し向けた現状なのだ。

「俺がいなければ……お前達は、戦わずに済んだのかもしれない」
　少年は赤い天使の下に行きたい、と本当は願いながら、彼にも背を向けられずに留まっていた。その理由も彼は知らない。
　視えているくせに、と桃花が笑った。そんな気がした。

了

命を分ける悪魔や天の翼ある者、
魔や「神」、霊体だけの死天使、
憑依体質のアークやその兄を除き、
世に戻る死者だらけの拙作でも、
「死者は甦らない」原則は一応
大事な根本、というお話でした。

アーク達は設定としては
「本当は死んでいない」側になり、
対して桃花は死者の道を選んでおり、
正史のD3でも重要な役所です。
時雨と天龍にいるトウカは冥夜で
桃花そのものではありません。
桃花にとって本作は幸いなエンドで
D3で心情を書ければ良いのですが、
パブーに掲載予定はありません。

橘診療所シリーズも初期は暗めで
すみません。やり直しも難しいですね。
読んで下さり有難うございました。

水晶兎

著　　pierrette***

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社